

掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成14年3月31日発行

# 鶺鴒沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 4 号

川上恵久会長

追悼特集号

(目次は表紙裏にあります)

『新編相模風土記稿』(天保13年、1842)に、「鶺鴒沼村久久比奴末半良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鶺鴒沼を語る会 発行

# 川上恵久会長が急逝

東屋記念碑建立などに尽力

温厚な人柄のまとめ役

「鵠沼を語る会」の会長川上恵久さんが、平成14年3月13日に急逝された。77歳だった。

まったく突然の訃報だった。

「鵠沼を語る会」の月例会が12日に行われ、川上さんはその会にも出席され、とくに変わった様子もなく会長としての報告などをなさった。この3月、鵠沼松が岡公園にモモの木を植える行事があり、当会からも2本の苗木を寄贈した。川上さんは例会の後、このモモの苗木に「寄贈 鵠沼を語る会」の木札をかけるため、会員と公園に行かれた。

その夜、ご自宅で倒れられた。

すぐ市民病院に運ばれたが、13日未明、亡くなられた。心不全だった。

川上さんは、平成11年4月、「鵠沼を語る会」6代目会長に就任された。穏やかで気さくで、その温厚な人柄は、当会にとってかけがえのない存在だった。

平成13年3月に完成した「東屋の跡」記念碑の建立に際しても、まとめ役として尽力された。また、自然環境の保護、歴史的家屋の保存運動などに関心を示され、「鵠沼の緑と文化財を守る会」の会員など多くのサークルに加わって熱心な活動をされていた。葬儀にはご遺族が驚かれるほど多くの方が参列した。

生前、川上さんと親しかった方々から追悼文を寄せていただいた。

追悼特集を組んで、川上さんのお人柄を偲ぶとともに、あらためて「川上さん、ありがとうございました」と感謝の言葉をお届けしたい。



平成13年3月22日「東屋の跡」碑除幕式で。川上さんは山本藤沢市長らとともに除幕のテープカットを行った。



## 細かい気配りをされた“長老”

「鵠沼の緑と文化財を守る会」代表 杉山 和彦

電話で川上さんが亡くなられたという連絡を受けたときは、しばらくは信じられない思いでした。

というのは川上さんは、2日前私たちの3月の例会に出席されました。その時少し体の具合が悪そうでしたので、皆が心配して病院に行ったらということになり、奥様にお知らせしてご一緒にかかりつけの湘南鎌倉病院に診察にいかれました。

夜になって、なんでもなかったので帰って来たよ、ありがとう、という電話をもらいよかったなぁと安心していただばかりでした。

会合の時も細かいところに気がつかれアドバイスをしてくれますので、誰言うとなく緑を守る会のなかで“長老”と呼ばれるようになりました。本人はまだ若いと、長老と呼ばれることに少し抵抗があったようですが、事実、力仕事、体を動かすことも若い人に負けずに、こまめに動き回る、サッソウとした若きおじいさんでした。お酒を愛し本当においしそうに飲む姿は目に焼き付いてはなれません。そのうち1杯やりましょう！

……短いお付き合いでしたが、ありがとうございました。

## 第二の人生の指針だった先輩

湘南石仏の会 阿部 秀雄

3月19日は、くげぬま探求クラブ探訪部会の「県下酒蔵めぐり」の12回目、締めめの回でした。

先日お会いしたとき、「参加しているクラブ外の人たちもふくめて20人ほどの皆さんに、おいしいお酒を毎月賞味させてくれてありがとう。次回は締めなので、ご苦勞会を盛大に開催しよう」と約束されたではないですか!!

19日は大いに期待しておりましたのに……。先輩のお話しがもう聞けない

のでしょうか。

私の第二の人生指針として先輩の日頃の活動やお話しが最高の教示、教訓でした。先輩がいろいろのボランティア活動の中で、いつでも皆様に慈しみの心で接してお世話をされている姿を見るたびに私自身も少しでも先輩を見習って努力してきました。人間生まれゝば必ず死すると言われますが、生きている間はぜひ先輩の日常生活のように布施の心を忘れずに生きてゆくことが、先輩への返礼かと思い生き抜きます。先輩の声が聞こえます。「いざ西に向かってお先に出かけます。そろそろござれあとの連中」(五岳上人遺訓)

## 惜 別

友人 原田 實 (片瀬在住)

「かながわともしび財団」をベースに、片瀬江の島地区の地域リーダーとしてご活躍の阿部秀雄さまから、川上様をご紹介下さったのは今年の六月でした。美空ひばり十三回忌にちなんで『りんご追分』と『悲しい酒』のエピソードを話して欲しいとのことで、早速、打ち合わせのため初めてご自宅を訪問しました。

本鵠沼に住んでいた頃、川上様のお嬢様とウチの三女が鵠洋小の同窓だったことを知り、誠に奇遇というか、阿部様のとりもつ縁で旧知の間がらのように親しくさせていただきました。プログラム作りと展示資料の打ち合わせに交流を重ね、六回も小宅へきてくださいました。さる一月、片瀬しおさいセンターで講演を聞きに行った時、混雑した出口でバツタリお会いしてお互いに「今日は!」と言っただけでお別れしたのが何とも心残りです。

この度突然の訃報に接し、これからもお付き合いさせていただこうと思っていた矢先、誠に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り致します。

## 川上さん、どうして、どうして……

会 員 佐藤 和子

私用で二カ月程留守にしないではず「二月、三月の例会はお休みします」と川上会長に伝えた折り「雪国に行くことだし、あなたもトシなのだから

身体には気をつけなさいよ」と。「ハイ、三月下旬にはお会いしますね」……

それがこの様な形での再会になるとは。訃報を受けた時は言葉が凍ってしまっていて“どうして、どうして”そればかりでした。

「鵠沼を語る会」は、同好会的な色あいの頃を土台に、今では地域に残る様々な事柄を発掘、調査し、更に研究にまで深め、結果を踏まえて提案等もする様になってきています。

川上さんは会員全体に気を配りながら、豊かなバランス感覚で運営に当たって下さいました。「東屋の跡」記念碑完成に至る迄のご苦勞、その後、佐江衆一、小山文雄両先生をお迎えしての記念碑完成公開講座の開催、そして目下、語る会の保管する資料を中心に、皆さんに展示できる郷土資料室開設のためにも努力を惜しまず、動いてくださっている矢先の旅立ちでした。

何事にも関心を持たれ、若々しい気持ちで積極的に参加されていた川上さんのスケジュールは何時もビッシリ。お酒が好きで心地よく酔われた際は「教子、教子」と奥様のお話しをなさり、オノロケも出たり暖かな御家庭でお幸せ一杯でしたのに……。いえ今でもあの元気な、大きなお声が旅先から聞こえてくる様です。いろいろと御指導いただき、本当にありがとうございました。

## お礼とお詫び

会 員    鈴木 三男吉

永い間のお礼を申し上げる暇もなく、こんなに急いで天国に旅立たれるとは夢にも思っていませんでした。そうならば去年の今頃、会長を辞めたいとおっしゃったとき、会のためにもう1年だけとお願いしたことが悔やまれてなりません。

ここに深くお詫び申し上げるとともに、今後とも天国という一段と高いところから好きなお酒を召し上がりながら「鵠沼を語る会」の将来を末永く見守って下さるようお願い致します。

芥川龍之介の小説「齒車」に登場する

## 小林理髪店（現柳川理容店）

（会員）岡田 哲明

今号では商店建築を取り上げる。会誌「鵠沼」81号で鵠沼海岸商店街100年の歴史を特集した。その中で一番歴史ある現存建物はどれかといえば柳川理容店（築、約80年）である。建物の老朽化が相当に進んでいるので今回、記録にとどめることとした。なお、歴史的記述の敬称は省略した。

### 建物の概要

所在地 藤沢市鵠沼海岸 2-7-1

規模 木造平屋建て 10.5坪（現在約13.0坪）

用途 貸し店舗

### いつ建てられたか

建設時期は不詳であるが、おおよその見当はつく。この建物は道路のむかい有田商店の所有である。したがって有田金八が明月庵を経営し始めた大正2年以降、大正12、3年までの10年余の間であることは間違いない。高木和男氏の記憶では大正12年の震災前には無かったとのこと。震災直後といえば復興の槌音たかく急速に商店街が形成されていった時期である。当初は小林理髪店がはいり、のちに柳川理髪店がテナントとなり現在の柳川理容店と名称が変わる。住居部分に若干の建て増し、ファサードに一部改装部分などが見受けられるが、基本的なところは変わりがなく、現在も当初の様式をよく残していると言える。

### 小林理髪店時代

鵠沼海岸商店街の小林理髪店は、現在も引地で営業している小林理髪店の支店としてスタートした。本店は明治時代に群馬県出身の小林太三郎・ヒロ夫妻が東



海道旧道沿い引地橋の近くに開業したのが始まりである。

二代目、政吉は機を見るに敏で、別荘の増加により急速に発展する鵠沼海岸に着目し（あるいは有田金八の勧誘により）支店を出したのである。当時、商店街には「床春」という理髪店があったが、技術の点で小林理髪店がアツという間に上級顧客を引きつけたのは想像に難くない。後述するが、政吉は常に最新技術の導入をこころがけていたからである。

政吉・志ん夫妻は八人の子宝に恵まれ、長男、次男を理髪師に育てあげ、事業はこれからという矢先、政吉は病に倒れ昭和 12 年、46 歳にて他界した。

志ん夫人は夫亡き後、頼りに思う長男、次男を相次いで徴兵され、働き手を失って、事業縮小のため鵠沼海岸の支店を引き払わざるを得なかったのであろう。この建物の小林理髪店時代はおおよそ 20 年間ということになる。

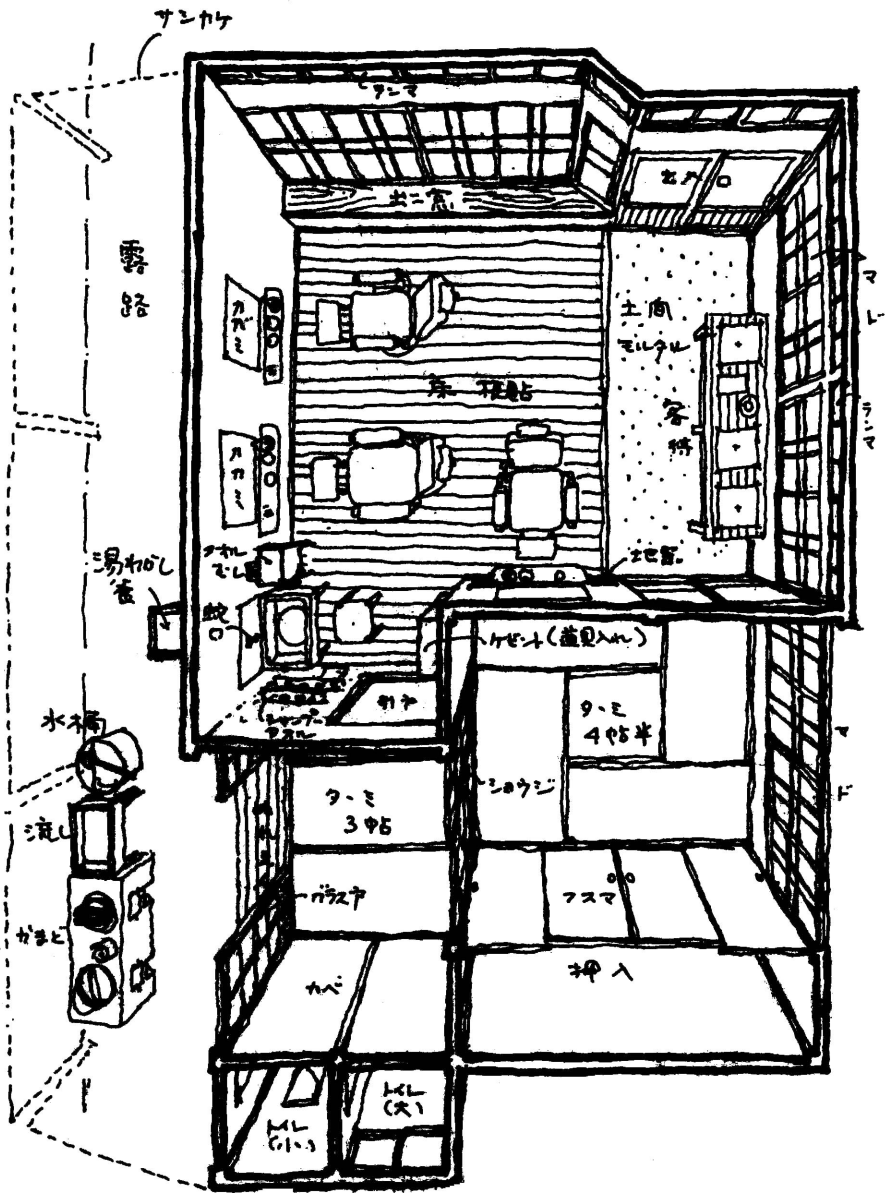
なお、本店は三代目にあたる長男の夫人ミチが尽力し戦後の混乱期を乗り切って、今は四代目を甥（三男正弘氏の子息）が継いで暖簾を守っている。

昭和 10 年から 12 年まで、この店で政吉の弟子として働いた亀井一雄氏によれば、政吉の母親ヒロが店に寝泊りして、職人一人と弟子一人の寝食の面倒をみた。政吉は本、支店間を行き来して仕事をした。当時、正弘氏は小学生でオバアチャン子であったからよく泊りがけで遊びにきていたそう。4.5 畳の間にヒロ、3 畳間に職人と弟子の 2 人が寝泊まりした。店には井戸がなく水は向かい側の有田商店の井戸から桶に汲んで運ぶのが日課であった。風呂も有田の風呂に入らせてもらった。給金をもらうと「鵠楽」でラーメンを食べるのが楽しみで、一杯 10 銭だったというが、床屋の値段と比べると結構高い食べ物だったことになる。

このころの床屋の料金は 25 銭、出張はお金持ちか偉いさんか結核患者にかぎられ 50 銭であったが、久松伯爵、広田弘毅元首相や福田医院の院長などは 2 円支払った上、珍しいお菓子などを下さったりした。久松伯爵のお屋敷へ先生（政吉のこと）についていったときのこと、うかがって控えていると「殿様のおなりー」と声があって伯爵が出てこられた。お金持ちでも一木與十郎藤沢町長はいつも店に来られたという。

亀井氏は「結核患者から出張をたのまれると互いに譲り合って行きたがらなかったものです。でも一度だけ若くて美しい抜けるように白い肌の女性患者の頬を当たったときは胸が高鳴って手が震えて困った… 僕はハタチ前だったからねエ、東屋におゆきさんという評判の美人がいてよく顔を当たりに来たのも懐かしい思い出です」と語る。

商店街通り



### 亀井一雄氏の記憶による昭和 12 年頃の店の様子

## 芥川の小説のモデル

芥川龍之介の小説「歯車」のなかに理髪店の主人が登場する。このモデルが小林政吉であろうといわれている。冒頭のところを少し引用する。

「歯車」 1 レエン・コウト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる為に鞆を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がわは大抵松ばかり茂っていた。上り列車に間に合うかどうかは可也怪しいのに違いなかった。

自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乗り合わせていた。彼は橐のようにまるまると肥った、短い顎髯の持ち主だった。僕は時間を気にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には昼間でも幽霊が出るって云うんですが。」

「昼間でもね」

僕は冬の西日の当たった向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合わせていた。

「尤も天氣の善い日には出ないそうです。一番多いのは雨のふる日だって云うんですが」

「雨のふる日に濡れに来るんじゃないか？」

「御常談で。……しかしレエン・コウトを着た幽霊だって云うんです」

自動車はラッパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになった。僕は或理髪店の主人に別れ、停車場の中へはいって行った。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだった。待合室のベンチにはレエン・コウトを着た男が一人ぼんやり外を眺めていた。僕は今聞いたばかりの幽霊の話を思い出した。……（以下略）

## 小林政吉と神奈川理容界



幕末から明治へ、西洋理髪の発祥は横浜である。この草創期に「通称かみそりの定」といはれた松本定吉は山下町 151 に店を構え大いに繁盛した。定吉は芝山兼太郎等優秀な後継者を育成したことで知られる。芝山は同じ山下町 32 に店を開き、大正 14 年に「芝山美容学校」を設立し後進の指導に当たる一方、外国客船が横浜に入港するたび乗船理髪師を自宅に呼んで新しい技術や知識、ニューファッションを得ることに勉めた。昭和 2 年、学校は横浜市生麦に移転、後に「横浜理容学校」と改名したが昭和 15 年 8 月、国策によって閉校となった。

小林政吉は、この芝山美容学校で教鞭をとっていた。おそらく師である芝山に乞われてのことと思われる。それだけ優秀な理髪師であった証だ。彼は芝山をたすけるとともに自身もそこを研鑽の場ととらえていた。また、神高（神奈川県高座郡）理髪組合の役員を勤めるなど、業界発展のため尽力中に亡くなったのは神奈川理容界にとっても大きな損失であった。早世が惜しまれるのである。

## 柳川理髪店時代

昭和 15 年ころ、柳川喜作がそのあとに入り柳川理髪店を開業する。現当主、弘之氏によれば戦中か戦後すぐくらいに正面ファサードを改装した。引き違いの入り口を両開きに、引き違いの窓を 5 連の縦軸回転の窓に、腰を大磯砂利の洗い出しに、さらにペンキ塗装にした。内部にも手が加えられ床の板敷き部分を広げ、壁天井もはりかえられた。また居住部分も三方に下屋を張り出し浴室や厨房をつくったため間取りは変化している。

## 建築的考察

この建物は建築技術的にはかなりレベルの低いものであるが、新興の商店街の貸家としてはこんなものであっただろうと考えられる。台風の際は建物全体が横にずれたという柳川氏の話から推定するに、基礎は玉石を置きその上に土台を据えただけと思われる。

構造体も末口は角材であっても先のほうは丸太に近い十分な断面を持っていない部材が使われ、桁の継ぎ手も追掛継手の省略型である。母屋部材の寸法も統一されていない。これは震災倒壊家屋の発生材を再利用した可能性もある。

外壁は杉板の押縁下見貼り（ただし、増築部分は横下見および縦リブ鉄板）、屋根は震災後一般的になった波板鉄板葺き 4 寸勾配である。

窓のガラスは建設当初のものが一部残っていて平滑度の悪い気泡の入ったスリガラスや羊歯模様の型ガラスは大正から昭和初期のもの。 宮沢賢治の詩の一節——窓のガラスの氷の羊歯はだんだん白い湯気にかはる——（冬と銀河ステーション）を髣髴させるなかなかお洒落なガラスが使われている。

軒は亜鉛鉄板の平板葺き。軒裏は正面部分は杉板にペンキ、側面部分は細いリブ状になった鉄板にペンキ塗りである。東面の欄間と窓との間の無目の上下には割り型の断面をもつボーダーがまわされ、柱には銀杏面をとった飾り板が付けられていて、このデザインは正面ファサードに及んでいたものと思われる。この洋

風の装飾は和風の建物に西洋床屋をアピールするささやかなデモンストレーションであったのであろう。インテリアでは接客スペースの天井に花柄を打ち出した一尺角のレリーフがはめ込まれていたそうで、床屋というのは仰向けになった客を退屈させないため、天井に金を掛けたものなのだそうです。

柳川理容店の現在の様子。

正面の改装は戦中、戦後頃というが昭和初期をおもわせるデザイン。



東側の小路に面したところ。  
当初のままと推測される窓。  
この小路をすこし入った  
貸し別荘イの4号に芥川  
は住んでいた。



柱につけられた飾り板  
と無目の上下に施され  
たボーダーにわずかに  
見られる洋風のデザイ  
ン。



西側の現在の様子。

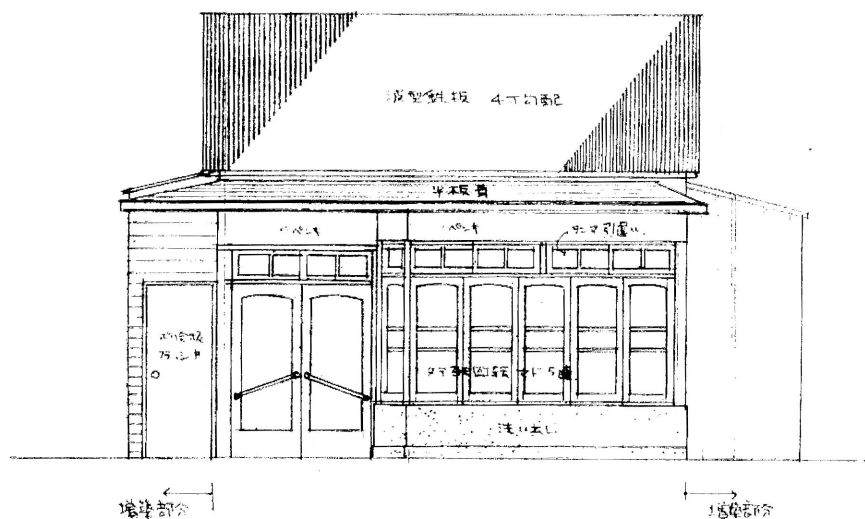
外壁の杉板の下見板張りは当初のまま、損傷が激しい。さし掛けの下屋が付いていた痕跡は定かでない。

本文執筆にあたり、小林正弘、長谷川英夫、亀井一雄、柳川弘之、高木和男、有田裕一各氏にご教示、ご協力をいただいた。

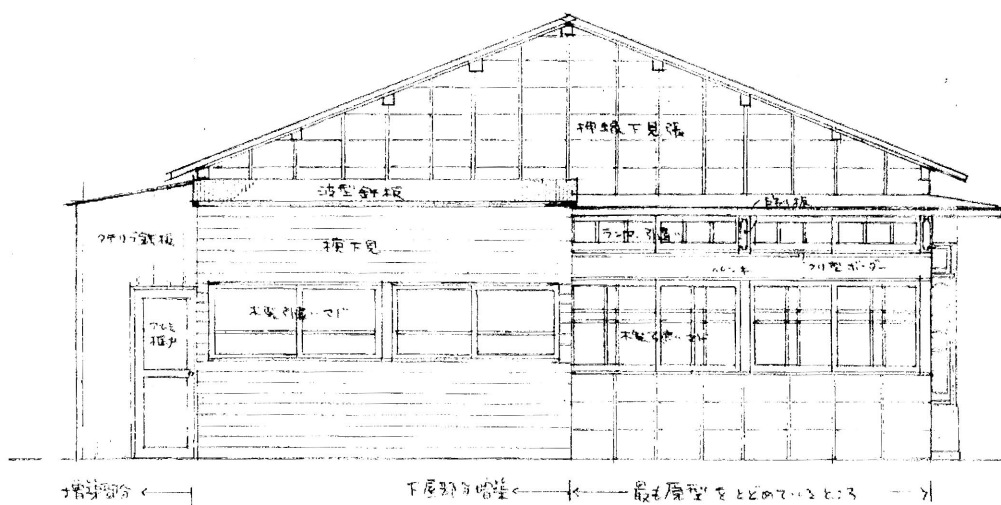
参考文献：会誌「鵠沼 81号」

「かながわの理容史 県理容環境衛生同業組合 組合創立 30 年史」

# 現在の柳川理容店の立面図



正面図



側面図



## 座談会 「鵠沼むかし語り」Ⅱ

### —— 半農半漁村のころの鵠沼 ——

2001年11月26日

場所 大東町内会館

#### 出席者（敬称略、カッコ内は年齢）

|             |    |               |    |
|-------------|----|---------------|----|
| 関 根 佐一郎(93) | 大東 | 榎 葉 昭 市(69)   | 原  |
| 浅 場 政 雄(88) | 堀川 | 浅 場 園 江(69)   | 荻田 |
| 横 田 松 良(80) | 清水 |               |    |
| 宮 崎 誠 一(75) | 上村 | 聞き手：鵠沼を語る会 9名 |    |
| 関 根 博(69)   | 引地 | 司 会：伊藤 聖(副会長) |    |

\*\*\* 本村は皇大神宮の氏子 \*\*\*

—— では、始めさせていただきます。鵠沼を語る会では、2年ほど前に皆さま方にお集まりいただいて、そのときは本村に残っている生活、習慣や講とか組とか、そういうものを中心にお話しいただいて、「鵠沼むかし語り」というタイトルで「鵠沼」79号に記録しました。今回は農作業とか漁業、地引き網の具体的な中身についてですね、実際にいつごろ、どうやってやったかということを記録に残しておきたいということで、この前の座談会の続きという形で具体的なお話を伺いたいと思います。皆さんはとてもお元気そうで、特に関根さんは93歳にもなったいまでも農作業に出ていらっしゃるようですが、まずは関根さんが子どもだったころからお願いします。

関根サ そうですね、私が自覚に残るところは大正の初め頃からですね。明治の41年生まれですから、僕の4つか5つのころまでで明治は終わるわけですからね。僕が物心ついたのは、小学校に上がった大正のころからですね。大正が一番私の印象にありますね。

—— そのあたりを中心に関根サさんにはお話しいただくことにして、それから昭和にかけては他の皆さん方もよくご存じだと思いますが、お爺さんやお婆さんに聞いた話も交えながら、明治のころのことも幾らかでも分かれば、

この座談会の幅も膨らみが出てくるんじゃないかということで、なるべく古い話を思い出していただきたいと思います。

で、先ず総論的なこととして、鵜沼の本村といわれるのは、皇大神宮の氏子になっていらっしゃる方の集落で、北の方からいいますと上村、宮ノ前、<sup>しゅくにわ</sup>宿庭、<sup>かりた</sup>清水、<sup>なかひがし</sup>荻田、大東、<sup>ひきじ</sup>仲東、<sup>しんでん</sup>原、<sup>はなたて</sup>堀川あたりまでになると思います。鵜沼全体ではあとの他に<sup>いしがみ</sup>引地とか新田、花立、石上と東の方もいるんですけど、石上、花立、新田あたりは、いずれまた別の形で取り上げたいと思っています。それで、本村に限ってお話をさせていただきたいと思っています。

明治12年に書かれた『皇国地誌』によりますと、石上や花立を含めた鵜沼村全体の全戸数は297、うち農業を生業とするもの212戸、漁業を営むもの70戸という記録が残っています。ということは、約300戸鵜沼にはあったわけですね。その中心になっているのは本村の方ですが、本村の方は300近いうちの200から250ぐらいあったんじゃないかと思うんですが。

関根サ 私が聞いているのは250ばかりだったということですね。

—— ああ、そうですか。それで、この中で一番大きかったのはどこですか。一番人口が多かったのは。

関根サ 原とね宮ノ前ですね。その次が荻田。清水。

—— 上村あたりは人口はどれぐらいだったんですか？

宮崎 上村はね、少ないんですよ。15～6軒ぐらい。明治の時代にはね。宿庭が一番小さいんですよ。

—— 集落は氏子の集まりなものですからね、境っていうのははっきりしないんですよ。例えば荻田と清水の境なんかははっきりしていませんね。

横田 あのね、清水はね、荻田の中に入っているのは、清水の新宅が荻田の地域に土地があるからそこへ住んでるんです。それで、入り組んでいる格好だね。もうこれは、昭和になってっから出た人なの。昭和の前には全然まとまっちゃってるの。

関根サ それは、明治にはしっかりしていたんですけど、明治以降になって分家に出ちゃったりして境がはっきりしなくなっちゃったんです。町内っていうのは集落なんですけど、いまじゃ地籍を越えてつきあいの関係で発生した集落が境がなくなった。発生はどうしてできたもんだか、以前に調べたこともあんだけど、分かんねえんです。

—— はあ、江戸時代ってことですか？

関根サ いや、いつだか分かんねえ。いつ大東とか仲東ができたんだか。だから徳川時代なんですかね。

\*\*\* 小作よりも自作が多い \*\*\*

—— これで大体集落の様子かが分かったんですが、そのうちお米を作っていらしたのは、どれくらいあったんでしょうか。お米は全然作らないで、畑作中心だったという方もあったんじゃないかと思うんですけど。田圃<sup>たんぼ</sup>を持たない方もね。また、田圃を耕すにしても小作だった方はどれくらいおられたか。何かご記憶はありますか？

宮崎 はい。上村の場合はみんな、当時は百姓だったと思うんですけど、本当はうちの方は陸地より水田の方が多かったんじゃないかと思います。鶺鴒沼全体では、畑と水田の割合は3対1くらいといわれてますけどね。いま推定しますと、農家で田圃を全然作ってなかったっていう農家はなかった。上村においては。



榛葉 宮ノ前はどうかっただすかね。宮ノ前は割と田圃を持ってる人は少なかったんじゃないですか。上の耕地<sup>かみ</sup>(いまの神明3、4丁目にあった田圃<sup>かた</sup>)の方へ宮ノ前の方は……。

宮崎 多少は来ていましたね。

榛葉 どっちかというとな宮ノ前の人は農家専門よりも副業の方が多かったんじゃないか、畑も少なかったんじゃないかと思うんですけどね。

関根サ そのことを出耕作<sup>でこうさく</sup>とか二次耕作っていう言葉を昔は使ったりするんですけどね。そういう小さい集落ごとのことをいったら、ほとんど全部出耕作ですよ。

榛葉 清水にも田圃があったですかね。

横田 いや、やっぱり小作が多かったんです。宮ノ前もね、奥田っていういまの石上のイトーヨーカドーの周りの田圃を宮ノ前の人は小作をしてたんです。ですから大分、奥田の田圃は農地解放で宮ノ前の人たちが戴いちゃったんです。清水の人は奥田ではあんまり作ってなかったんだけど、いまの市民病院があんでしょ？ あっちの方を小作してる人がほとんどだったの。大清水ね。宮ノ前の人は堀川の八部の田圃、あすこんとこに清水の人も自分の田

圃があった人が4～5人いるんですよ。その人たちは自分の田圃ね。やっばりそこでたくさん取って、自分とこの生活が立っている人がいましたよ。

榛葉 宮ノ前は3軒か4軒が堀川田に自分の田圃があつて、あとの人は小作で、いまいった奥田に行く人が多かったですね。宮ノ前は、畑が多かったもんで、田圃は小作で済ましちゃったということもある。

—— あと、荻田は？

浅場リ 私はねえ、嫁に来てからのことですから。だけど、話のなかで聞くと、あちらの八部の方？ それから打鯛場<sup>うちいわしば</sup>、あそこのこちらの中井<sup>しものさわ</sup>の下の沢が一番多かったようですね。

榛葉 シタノサワっていうんですか？ それともシモノサワ？

浅場リ シモノサワでいいんです。

横田 いまの消防があんでしょ？ あの消防のあっちかたとこっちかたに田圃があつたんです。

榛葉 荻田の周辺に田圃があつて、一部は堀川田までのびていったわけですね。

関根サ 途中で申し訳ないけど、字は下の沢って書いてシタともシモとも読むけれども、あれはね、通称シタノサワ、略してシタノサっていったんですよ。シモノサワとはいわなかった。

横田 <sup>しものさわ</sup>下の沢のそこはね、2町歩ほどはなかったですよ。

榛葉 あと、堀川田は、通称ホリカワダといいますけど、それは仲東。大東の人はなかったかね、堀川田は。大きい地主さんが一部田圃として持ってたのは、これでしょうね。あと原と堀川が主体で、八部の方は辻堂の人が大分入り込んで来てたんですよ。これも辻堂は田圃がないから……

—— 小作ですと、皆さんどれくらいの田圃を耕しておられたんでしょう。何反ぐらい。

横田 多い人は3反以上作ってる。小作はね。

関根サ それは、地主がどれくらいって決めることなんで、小作がいくらっていつでもだめなんです。

—— 地主さんっていうのは、鵠沼には余りいなかったんですか。

関根サ いないんです。

—— どこにいたんでしょう。

関根ヒ 藤沢<sup>かた</sup>の方だね。

関根サ 鵜沼は200戸から250戸の人が大体みんな農家ですからね。鵜沼全体の耕地面積を250で割っても幾らにもならないでしょう。地主ってのはね、うちの本家と大斎藤ぐらいで、あとは部落で大体自作農ってのが多いんですよ。—— だから、小作とか地主じゃなく、自作農でしょ？ 自分の田圃を持っていて自分で耕すってことね。だからいわば自分の食べ量ぐらいは自分とこで穫るという程度のものでしょうね。

関根サ それで半農半漁という構成ができてたんですよ。

榛葉 繰り返しますと、宮ノ前の方は、普段田圃を地主から借りて米を作っていたということですね。その他の鵜沼は小作よりも自作が多かった。

関根サ 地主っていうのは大斎藤ぐらいのもんですよ。なんぼでもない。何%ですよ。

—— 関根さんの本家もやっぱり地主でおられたんでしょう？ その2軒ぐらいですか？ 鵜沼の方で地主っていうのは。

関根サ うん、大きいのはね。

関根ヒ 大斎藤と関根ですね。

—— あとは自作農……。

榛葉 その自作農で、代表されるのは原とか堀川が堀川田。ここは20町歩でしたね。それが、明治から引地川の蛇行でもって細分化されておったものを、昭和に入って区画整理をして、いまのようないい田圃になったですけれども、それができたときは、ほとんど自作農ですね。堀川田の20町歩は。

—— 自作っていうと、2反歩なら2反歩の田圃から上がった米というのは、自分の家で大体全部消費するんですか？ 食べるお米はそれで間に合うんですか？

関根サ それはねえ、自給率ってのは少なくて、大体米作では間に合わなくて、麦作ですね。麦飯食ってたんですよ。大臣の池田さんの「貧乏人は麦を食え」じゃねえけど。あの、麦飯を大体半分ぐらい。

—— お米と麦飯半々ってことですか。

関根サ それほどもなかったんですよ、米が。麦食わなきゃやっていけない。

—— もちろん、ムギというのはオオムギですよ。そうすると、田圃を持ってない方は、お米を買ってたんですか？

関根サ そうですね、買ってたんです。

—— オカボ(陸稻)はやってたんですか？

宮崎 オカボもやりましたね。

関根サ オカボの風景ってのは、いまのように下水がねえもんだからね、大体



湿気のあるところが多いもんですからね、排水路ってもんがねえんだから、自分でこうやって畑の<sup>あいだ</sup>間 あ穴掘って水路を造って、その低いところへ井戸掘って、跳ね釣瓶で網で、われわれも担いだことがあります。すぐ乾いちゃうんですよ、乾燥地帯だから。

—— 砂地だしねえ。

関根サ それで、水を担いじゃあ、掛けて歩いた覚えがありますよ。

—— じゃあ、オカボの水は昔はほとんど井戸で……。

横田 いや、昔はね、40cm掘んと、もう水は流れちゃったの。道路の<sup>はた</sup>端がね。40cmも掘んと堀になっちゃったの。自然に水が流れてたの。それで、畑は水掛けってのは照りでないとやんないの。もう、水は柄杓<sup>ひしゃく</sup>で取れんですよ、この辺は。だからオカボは、いまいう水掛けなんてやるとこのオカボは取れないの。いまの日本精工の場所はいいオカボが取れたんです。水はこれくらいで漬いちゃうんだから。だから一年中<sup>し</sup>滲みっちゃってんの。そういうところはやっぱり作るもんを選んじゃってね。オカボとか白いイモのサツマイモ、ああいうなのは旨いサツマイモが穫れるんですよ。だけど<sup>たいはく</sup>太白<sup>たいはく</sup>って、皮が赤い柔らかいやつがあるのね、乾燥諸にするサツマイモは、あっこはだめなの。日本精工の場所は土が硬くて、掘れないような土なの。だからいいものが穫れるんですよ、ネギ(葱)とかそういうものはね。

榛葉 なるほど。じゃ、日本精工の中には高松さんの毘沙門天があった、ちょっと小高くなってますね。あれは元々あって、砂山だったんでしょけど、あれ以外はほとんど低かったんですか？

横田 あっこは特別な。

榛葉 それから、日本精工の北門から北側にかけて、ちょっと傾斜地でしょ？あれは鵠沼分ではないんですけど、養蚕試験所があそこにはあったって話をよく聞くんですがね。

横田 養蚕試験所はね、落合材木屋があったでしょ？ 落合材木屋の向こっ側に高い山があったの。砂山のね。その上で養蚕試験所をやったの。

榛葉 そうすると、日本精工ができる前の土地は桑を作るような畑じゃなくて、オカボが主体のような湿気地だったってことですね。



横田 そう、湿気地だったんです。

榛葉 はあ、これは初めてここで確認できるんですけどね。

関根サ 横須賀って地名なんですよ。

榛葉 それについて、「ピッタリ」っていう名前もあるんですよ、横須賀の中に。あれが分からないんですけどね。

関根サ おっしゃたとおりね、あの精工のところに試験所があるのは、三角地帯のいまガードがあるとこね、そこにできたて決まっておった、あの下んところに蚕業試験所があった。小高い方にハウスがあって、下っ側は桑園……。

榛葉 桑畑ね？ そこはある程度砂丘に近いところでしょ？ いわゆるオカガが作れないようなところに桑園、桑畑があったってことでしょ？

関根サ いまもマッチャン（横田氏）がいったように、水があるっていうことは、雨が降るときはそれでできたんです。乾燥するときはやっぱり担いだですよ、水を掛けるのに。それじゃなきゃできやしない。砂っぽかった。乾きや、すっ飛んじやうから……。

榛葉 いまの話のついでですけど、養蚕試験所が鶴沼と藤沢の境にあったということはですね、この近所は相当養蚕が盛んだったっていうこと……。

横田 あのね、そのお蚕様おこごまを作っている家のね、物置は違うの。ここにいる浅場さんの家は大きい物置があったの。

榛葉 自宅の他に物置ですね？

横田 こないだ火事になったでしょう、浅場さんの家が。あの物置が養蚕所なの。試験所へ納める養蚕所。物置の二階が総二階の。

浅場リ そうなの、それで今朝ね、プレハブの中から大急ぎであつたのを引きずり出してみたんですけど、これだけは、やっと探し出して（図面を拵げ）この蚕室っていう図面があつたんですよ。この蚕室が燃えちゃったんです、今年の3月に。



横田 養蚕やってる家は特別の物置があつたの。そんでないと奥の間じゃ飼えないんだもの。

浅場リ こういうふうな長方形の物置なんですよ、ええ。

榛葉 じゃあ、浅場さんとこの桑畑はどこにあつたんですか。

浅場リ それはあの、鶴洋の……。

横田 鶴洋小学校の北の畑が、砂っ場すなっぱなの。ああいう砂っ場の畑でないと、野菜が穫れねえんだよ、ね。

浅場リ あそこは最近はあるのように砂ですけど、昔は雨が降るとすぐ田圃になったところでした。大正時代には岡田っていったそうです。その水分は、水っ気は水が地面近くにあったんですね。

\*\*\* 稲の種まきは5月1日 \*\*\*

—— では、元へ戻しますけれども、苗代作りですね。これは4月の上旬で  
すか？ 田起こしをして、苗代の準備をするっていうのは。もうちょっと、  
早いですが、時間的には。

榛葉 本来田圃ですと、4月の上旬からもう、田起こしをして……。

関根サ 苗代っていうのはねえ、大体5月の1日ついたちごろですよ。

—— ああ、5月になってからですか。

関根ヒ それは種まきですよ。種まきは5月の1日、それが大体鵠沼の基準で  
すね。

—— 苗代作りっていうのはもっと早いようですけど……。

関根サ でもねえ、いまと違って4月だと寒い、水が冷てえんですよ。いまは  
機械だから一番苗は作っちゃってんだけど、箱を使って。その当時は、大体  
種をまくには、田を起こすのはその前だから、常識でわかんだろうけど、ま  
くのは大体5月1日から端午のお節句にかけてでね。

関根ヒ ですから、種まきが5月の初旬ですから、田植えが早いとこで6月の  
10日前後ですよ。それっていうのがね、5月の下旬でムギが大体終わるん  
ですよ。5月の下旬から6月の上旬で、一応ムギの収穫が終わりますから、そ  
れで終わって、陽気の悪いときに田植えをやるんですよ。で、天気の良いと  
きにはムギこなしと、陽気の悪いときに田圃をやりますから、そうですね、  
田圃は6月の中旬……。

横田 <sup>はつか</sup> 20日過ぎだね。

—— では、梅雨に入ってからですね。

関根ヒ そう。

—— で、種籾はやはり水に浸して置くんですか？

関根ヒ 私たちはねえ、榛葉にちょっと訊きたいんだけど、水に溶かすと青い  
……。

榛葉 ウスブルン。

関根<sup>ヒ</sup> ウスプルン。それでねえ、四斗樽で浸けてねえ、一回親父に怒られたことがあるんですよ。暮れに沢庵<sup>たくあん</sup>を漬ける樽へ使っちゃったんです。農薬でしょう。あれ、樽に青く付いちゃうんです。私の親父は勤め人をしてましたから、余りそういうこと詳しくないんですよ。近所の詳しい小父<sup>しちやう</sup>さんに訊いたら、下肥<sup>しもこえ</sup>の樽をきれいに洗ってね、それでしやかす（浸す）んだっていうんです。私はそこまでまだ慣れてませんでしたから、改良普及所かなんかが、「ウスプルンで消毒しろ」っていうから、沢庵の樽が空いてたから、大っきいから、うっちゃってやっちゃったわけですよ（笑声）。

関根<sup>サ</sup> ウスプルンっていうのはね。科学が発達してからで、その前は温湯浸法<sup>おんとうしんぽう</sup>っていうのがあって、お湯でね。稲熱病<sup>いもち</sup>っていう病気があるんですよ、稲には。種籾<sup>こめ</sup>をぬるま湯で浸して、芽を出して、でも温湯浸法をやんのは進歩的な人だった……。

榛葉 私んところは風呂釜、五右衛門風呂に一晩浸けました。それから、ウスプルンという薬が出たもので、そういうことは止めて、

—— 風呂へ浸けるときは、俵のままですか？

榛葉 いえいえ、南京袋へ入れて、浸してつけ込むんですね。

—— で、苗代で育てるのはどれぐらいの期間なんですか？

関根<sup>ヒ</sup> だから、5月の1日ぐらいにまいて、6月の、先ず早くつても<sup>とおか</sup>10日でしょう。

—— ああ、40日ぐらいかかるんですね。

関根<sup>ヒ</sup> 40日から50日でしょう。

横田 40日以上ですよ。30日だとこんな（親指と人差し指を拡げて）なの。

関根<sup>ヒ</sup> いや、そんなになんないよ。12～3cm。それで、育ちが悪いときには、なるたけ水を張るんですよ。

—— 田圃に？

関根<sup>ヒ</sup> そう、水をなるたけ張るの。そうしんと、伸びがいいわけ。そういうふうに私は理解してやってましたけどね。

—— そうすると、田圃に水を引く、いわゆる堰を止める、そういうのがありましたよね。あれは、川の堰を閉めるのはいつごろなんですか？

榛葉 それは、実はあの堰は、堀川田20町歩を潤すための堰ですけど、それ以前は苗代だけを作る場所へ、水路を利用して水を引いてたんですよ。それはですから5月に入ると、いわゆる水面は低くていいんです、堰の水面は。

苗代やるときはですね。5月の1日ぐらいに張ったんでしょう。私の子どものころは、5月4日、お節句の前の日にですね、必ず伏せたもんですがね。籾種をまいたもんですけど、そのごろはいわゆる八部まで行かない、堰から200mくらい下流のところ、苗代専門の場所があったんです。みんなでそこへ共同で田圃を借りて、共同って言うよりか、そこだけまとめて水を引くために、入り組んでやりましたね。

—— 堰はいつごろできたんですか？

**榛葉** 堰は引地川が改修（昭和8年2月1日着工）されて、改修されたとき



に堀川田も、いわゆる300坪1反割として、できたんですよ。それ以前は引地川が蛇行してましたからね、田圃もそれにつれて、それこそ入り組んでいた。私たちは一つの畑が150坪、200坪もあればいい方で、50坪っていう畑もあったくらいで、それと同じような状態が堀川田にあったんですよ。

そのころは引地川も水量がなくて、ところどころ小川のようなのがあって、そこから田圃へ水を引いておったんですね。それが、区画整理することによって、堰を設け、堀川田20町歩へ全面的に水を引けるように真ん中へ用水路を設けて、その用水路の末端の方は3分の1ぐらいは、逆に排水路になって、昔の堀川っていう川があったんですよ。

—— われわれは古川っていつている……。

**榛葉** 古川ね、あれが堀川でいいですよ。それが引地川じゃなくて、排水路としての堀川……。

—— 上村の方は、どういう……。

**関根**（空中写真を指して）これが今の湘南高校です。それで、これが上村で、一中がここですから、一中の周りの、この黒いところが上の耕地の田圃があったところです。ここの水源は、この山の絞り水とね、いざ水が必要だというときには、湘南中学のプールを1年に2回や3回は開けてくれる。

—— 湘南中学ができる前は……。

**関根** さあ、それは知りません（笑声）。

**宮崎** 湘南ができる前は、プールがなかったですから、上村っていうのは非常に水争いが厳しかったです。

—— その日本精工、さっき横須賀っていつてたけど、そのあたりも田圃はあったんですか。

関根 ありましたよ。

—— その水は、その山の絞り水と……。

宮崎 （空中写真を指して）北東から南西へ流れるやつと、それから皇大神宮の裏に池がありましてね、これが標高が高かったんです。それで北西の方へ流れたんです、水が、逆に。

—— この水はそれじゃ、どっから湧いてるんですか？

宮崎 あの、自然に、この辺も田圃でしたから、私ども小さい時分は。これへ入って、これかな？ ここまで逆に流れたんです。

—— それで、田植えっていうのは、共同でやったわけですか？ それとも、みんなそれぞれに……。

関根 ええ、それぞれです。

—— それぞれに……。で、学校は休みになったんですか？

関根 学校はね、6月に「農繁期休校」ってのがあったんですよ、われわれの子どものときには。学校は休みです。それはね、ムギの穫り入れのときからで、6月1日になんとねえ、学校は農繁期休校で休めんです。

—— 6月1日から休み。はあ。

関根 1週間。5日だったかな？

榛葉 宮崎さん、私たちは農繁休暇なんてないよね。

宮崎 ない。なかった。

横田 ないよ、そんなもなあ。

榛葉 昭和8年ごろまであったのかなあ？

—— 稲には肥料ってのは、やるんですか？

関根 追肥かね？

—— 追肥っていうか、稲そのものにやるでしょ？ 田植えの後。

関根 いや、後じゃなくて先にやるんです。

—— 先にやるんですか。はあ、耕すときに。それは化学肥料はないでしょ？  
まだ。

関根 はあ、それは、化学肥料はないから、ダシがあった、魚粉なんか……。

—— あ、魚粉ね。干鰯<sup>ほしか</sup>ですね。

関根 干鰯<sup>おおぼ</sup>だとか、朝鮮大羽とか、そんなものを……。

榛葉 それとあの、満州から入った、大豆の……。

—— 大豆粕をね。

関根サ はい。あれは満州。それで、朝鮮大羽っていうのはねえ、ニシンです。

榛葉 こんな大きな、(腕を拡げて大きさを示し) こんな俵で……。それはいつの時代から入ったのか、おそらくモモ畑あたりから……。

—— お米でこんな時間がかかったんじゃあ…… (笑声)。少し端折<sup>はしよ</sup>って……。それで、稲掛<sup>はき</sup>みたいなのは、田圃に作ってあるんですか？

関根サ そうそうそう。

—— 田圃に作ってある。それで掛けて干すわけでしょ？

関根サ いやあ、あの、大束<sup>おおたば</sup>っていったね、そのまま持ってって脱穀しちゃったんですね。

—— 干さないで脱穀したんですか？

宮崎 いや、田のクロ(畔)にねえ、置いとくと結構乾くんですよ。

横田 いや、干したのは、ずっとこっちへ来てです。昭和の10年～20年ころから干し始めたの、その前は、田のクロへ将棋倒しに倒して並べて置いたの。それで、軽くなったら、それを家へ運んだの。当時はねえ、小束にしないんですよ。大束で田のクロへ将棋倒しに立てて帰って来ちゃう。それが軽くなってから、家へ運んでねえ、それをこいでっから、粳<sup>むしろ</sup>を箆で干したの。だから大変ですよ。それを毎日やندしょう？ 3日や4日やそこらは干すからね、昭和の20年ごろからですよ、陰干しってねえ、吊したのは。

—— 関根(サ)さんたちのころは、もう電気の動力の脱穀機ってのは、あったんですか？

関根サ いや、足で踏んだんです。その前は千歯<sup>せんば</sup>ってね……。

横田 新しいことは、訊きたくないんだからねえ、古い話を教えてやんな！  
(笑声) 千歯でねえ、こうやって、こうやってこくんだ。

関根と 僕らは、やったことない。種粳<sup>むしろ</sup>を取るときだけは、使ったけどねえ。それ以外は千歯は使ったことない。

\*\*\* 麦の間に甘藷を植えて \*\*\*

—— 私たちは、麦畑の間にサツマイモを植えて、ムギを刈り取った後にサツマイモが育つと思っているんですけども、日本全国そういう植え方をして

いるわけじゃなくて、一般のところはムギを刈っちゃって、その後にサツマイモを植えるというところが多いんですよ。

横田 そうするとねえ、イモが着かないの。鵠沼ではしおみちゃう(萎れる)の、ムギがあんから陰んかって、どうやら着くのね。だから、ムギがあるうち植えないと、サツマイモ作るのに骨が折れるのね。

—— おそらくこれは、湘南地帯一帯のね、砂丘の砂地の地帯の特色みたいなんですけど。ところで、サツマイモが入ってきたのは、関根さんのお話だと、明治の初めに宮ノ前の小林栄蔵さんて方が、川崎の六郷方面から相州白<sup>そうしゅうしろ</sup>の苗を持ってきて、普及したというふうに聞いてるんですが。

関根サ そう聞いてます。

—— 明治の、イモが入ってくる前は、ムギの間は何も植えないでしたか、どうだったんでしょうね。お爺さんかお婆さんに聞いてますか？

関根ヒ 聞いてないねえ。

—— ムギの方が先でしょ？ サツマイモよりは。

関根サ ムギってのは、何でも縄文時代からあるっていうんだけど(笑声)。

—— あったんでしょうね。

関根サ ムギはね、昔からムギは鵠沼にはあった……。

横田 鵠沼ではいうまでもないなあ。

関根サ イモを植えるってのは、いまでもわれわれ難しいと思っちゃってるんだけど、時期が、温度が関係あるからね、あんまり早くやってもできないしね、遅いと不味い<sup>まず</sup>しね、われわれ事実やってみて、ムギの中に植えた方が、活着がいいですよ。楽なんだよ、日陰だもんだから。水やるわけじゃねえから、雨が降ると、やりにくいですよ。本当にイモ植えは。ムギ穫っても、着きますよ。8月だって、もうできんだから、しかも時期的に早くできる。

榛葉 それが鵠沼のサツマイモの特徴で、砂地で地温が上がるのが早いでしょう、そうすると、よそでできる前に鵠沼のサツマイモができて、よそへ出荷できたってことでね……。

関根サ イモの歴史は、私、聞いたことがあるんだけどね、宮ノ前の古宮一郎さんが来られたときに、いわゆる聞き捨てる話をしたの、私は事実その当時はまだ生まれてねえから……(笑声)。

—— ただそれが記録されて残っちゃうとね、それが定説……決まったようになっちゃうんですよ。



関根サ そしたらねえ、皆さん知ってんかね、イモがいつ鵠沼に入ってきたか。

宮崎 それは、ちょっと判んねえな。

関根サ だあれも知らねえらしいんだ。

関根ヒ （横田氏に）鵠沼に入ってきた時期だって、サツマイモが。

横田 時期は判らんないねえ。

関根サ 鵠沼にイモの入ってきた歴史は、私、そいつ訊かれるのが一番いやなんだけどね。でもあの、そいつは子どものときから知ってたの、その話は。小林栄蔵さんという、イサチャンとこが先祖なんですよ。その人が持ってきたと……。

宮崎 その人が持ってきたときが、鵠沼に入ってきたときだったかなあ。

関根サ そう聞いたよ。そいでね、その人が持ってきて、そのイモ屋、小林栄蔵って人も「諸栄」とかいふ仲買いしてた人なの、昔。われわれが知ってるときは、もう、やってませんでした、でも、その前は、そのイモ屋をやっていたらしいの。その人が、どこからか持ってきて植えたら、町内の若い衆がね、「栄さんとこじゃ、イモへえものを持ってきて、植えたんだそう。みんな夜かっぱらいに行くべえじゃねえか」ってんでね、行ったんだよ（笑声）。で、行ったら何もなくてねえじゃんか（笑声）。「何もなくてねえから、引っこ抜いて捨てちめえ」ってんで引っこいだら出てきた（爆笑）。それがねえ、鵠沼のイモの歴史。それ以外には、何にもねえです。それがねえ、こういうことが本当だったのが何もねえんです。私が聞いたのは、これが事実じゃねえかと思うんです。

—— で、サツマイモの苗床はいつごろ作るんですか？

関根ヒ 苗床はね、大体3月の中旬にね、お彼岸にサツマイモをもう伏せるんです。それで、一番苗がね、5月のお節句終わるともうできる。普通にできるサツマイモの苗ですと、5月のお節句後には、一番苗がこげるわけです。

—— 畑に植えられる苗になるわけですね？

関根ヒ ええ、3月の中旬に伏せて、使える苗に5月上旬の終わる時分にはこげるわけです。それが、この辺のサツマイモの標準的なやり方です。

横田 だからね、苗床を作ないと穫れねえっていつてやってよ。

—— 鵠沼で苗作りもやったってことですか？

宮崎 やりました。

—— 苗床の大きさは、<sup>たたみ</sup> 畳1 <sup>じょう</sup> 畳、もっとあるかな。

宮崎 いやいや、みんな8畳から10畳ぐらいありましたよ。

—— 苗床の話ですけどね、あれは中は何が入っているのですか？

関根 〃 その家によってねえ、色んなやり方がありますけど、主に落ち葉です  
すね。

宮崎 まあ、堆肥ですね。

関根 〃 それで32~3度(℃)から35~6度温度がないと、5月の上旬には取れま  
せんからね、芽が出ませんから……。

—— それが出るのが5月……。

関根 〃 3月のお彼岸時分に、苗床へ種イモを伏せるんですけど、カンバなり  
藁くずで床を作りますね、それでその藁なりカンバの上へ前  
の年に使ったサツマイモの床を積んどくんです。そうすると  
それが大体半分ぐらい泥みたいになるんです。それを一番上  
へやって、それへサツマイモを並べて、それでまたサツマイ  
モが被るまで泥で被して、その上へ初殻を、そうですね2寸  
ぐらい……。



横田 もっとだよ、5寸ぐれえ、そんでねえと茎が長くなんねえ。

関根 〃 あ、そうかそうか、それでその上へ藁で、最初のうちは、下から熱が  
逃げないように今度はするんですよ。それを下手をすると、温度が上がり過  
ぎちゃって、サツマイモが腐っちゃう……。藁の束のやつを、熱が逃げない  
ようにこう、並べて置くんですけど、それをどけちゃあ、温度計を挿して…  
…。

横田 温度検査するんですよ。

関根 〃 もたもたしてると、藁が多かったりすると、一遍に……。藁の上に泥  
を被せる前に下肥を打ちますから、藁と下肥がカンバの割合で、熱のうんと  
出るとこと、出ないとこと……。

—— カンバってどういう字を書くんですか？

関根 〃 落ち葉ですよ。そういう方法でやるんですけど、やはり4月の半ばご  
ろまでは、温度調節のために、みなさん相当神経を使ったと思いますよ。

—— で、5月に取れるわけですか。

関根 〃 一番苗は、5月のお節句が終わると早々に取れますねえ。

—— 話が戻るんですけどね、ムギをまきますけどね、それは11月から12月  
ころですか？

関根<sup>ヒ</sup> いや、オオムギは10月の下旬ですよ。

—— オオムギは10月の下旬。で、コムギは？

関根<sup>ヒ</sup> 11月の七五三(15日)ころまでに……。

—— 七五三ころまで。はあはあ。で、その後ね、<sup>あと</sup>鵠沼の、よくこれは岸田<sup>りゅうせい</sup>劉 生さんの絵にもあるんだけど、こういうその、<sup>かざよ</sup>風除けを立てますよね。これは何か特別の名前はあるんですか？ 風除けでいいんですか？

関根<sup>ヒ</sup> 風除けです。

—— 風除けはムギの殻をこう二つに折って、こんなふうにして……。

関根<sup>ヒ</sup> コムギの殻をね。

横田 それね、砂をね、秋の西の風が吹くとね、畑の砂を飛ばしちゃうんですよ。そのために、麦殻を折って、畑へずーっと一列に立てるんですよ。それが大変なの。

関根<sup>ヒ</sup> 腰が痛くてねえ。

横田 腰を曲げてねえ、鍬でね、穴あ空けてそこへ折っぺしよって立てんの。

—— 鍬っていうのは、筍掘るようなこんな幅の広いやつでしょ？

榛葉 あれ、名前何ていったっけかなあ？

横田 鵠沼、辻堂の人でないと、これはやんないの。

関根<sup>ヒ</sup> だから、大庭の方の人は立てない。

—— 鵠沼だけですかねえ。

横田 これが特徴だねえ。

—— はあ……。はい。じゃ、ムギはいま、風除けまで終わって、そして、麦踏みってのは何回ぐらいたったんですか？

関根<sup>ヒ</sup> よく、私なんかがいわれたのは、何回でもやればやるほどいいというふう……。

宮崎 学校から帰ってくると、もう、麦踏み行ってこいって行って……。

—— 毎日ですか？

宮崎 ええ、毎日。

関根<sup>サ</sup> 麦踏みは何のためにやるか……。

—— 霜で浮くからでしょ？ 根が。

関根<sup>サ</sup> そうです。それはねえ、昔はよく霜柱が立ったから押したんですよ、浮いちまうもんね。

—— 昔は毎日霜が立ちましたからね。だから、毎日やったわけ……。

関根サ だから何回やってもいいし……。

—— では、学校から帰ってきたらほとんど毎日行ってたって感じですね。

関根ヒ でも家を出んのはねえ、「麦踏みに行つて来る」つて出て……（笑声）。  
あとは知らんの……。

—— 「踏んでねえじゃねえか」つていわれて……。

関根ヒ そんな、5回や……。

関根サ ムギ、いつから始まったかっていうのは判んねえですね。

\*\*\* 関西で好評だったイモ \*\*\*

—— これはもうね、昔からあったわけでね、で、サツマイモの方が後から入ってきて、その間に植えるようになったということですね。じゃあイモの種類ですけどね、われわれ子どものころ食べたイモってのは、何か太白<sup>たいはく</sup>っていうイモでしたけど、一番最初に入ってきたこの相州白<sup>そうしゅうしろ</sup>ってのと違うんですか、太白<sup>たいはく</sup>ってのは？

関根サ 古宮さんに訊かれたから知ってる限りいっただけで、皆さんに訊いて下さい。

関根ヒ いやあ、相違点は私なんかには判りません。私なんかは皮が赤くて中が白いのを太白と、それで戦後改良されてねえ、中が黄色いやつが農林1号と、それで中が太白と違って、何ていうんですかねえ、いまして収量が多いのが農林10号<sup>農林10号</sup>ってのが確かあったと思うんですけど。

関根サ あれは最近のやつだよ。

関根ヒ だから戦後のやつですよ。

榛葉 あれは改良したやつは金時<sup>きんとき</sup>っていうの。あれは昔からあったんだね。

関根ヒ あれはいまでも有んべ？

—— 中が黄色いやつですね。

関根ヒ だけどあれは収量が少ないわけよね。太白から比べても少ないんですよ。

榛葉 まるっきり少ないね、美味しかったけどね。

関根サ これは私がいったことを皆さん裏付けされないけど、三つあったんですよ、相州白<sup>そうしゅうしろ</sup>と、花魁<sup>おいらん</sup>花魁<sup>おいらん</sup>つていった太白と……。

—— 太白のことを花魁<sup>おいらん</sup>つていうんですか？ 中が白で外が赤いからかな。

関根サ それといまの<sup>ほんあか</sup>本赤っていったんですけど、あれ何ていうのか学名分かんないんですけど……。

—— 本赤？

関根サ 本赤。それがね、素晴らしくいい味がして旨かった。旨いイモだった。だけどねえ、火山灰土、ポカ土っていう、あっこへは赤くていい色でよくできるけど、鵠沼へ持ってくるとね、同じものを六会の石川から私が持ってきてここへ植えんと、色ができねえんです。この砂地じゃ。だから土質を選ぶらしい……。で、収量もいまの話のようにねえ、色も褪めちまうし、収量もねえし……。

—— じゃ、余り鵠沼じゃできなかった……。

関根サ いやいや、やらない。

—— そうすると鵠沼でやってたのは、相州白と、花魁といわれる太白と、それから本赤ですね（注1）。農林1号ってのは、戦後でしょ？

関根ヒ 戦後。

—— 戦時中はなかったですか？

関根ヒ ないと思いましたねえ。

—— アルコール燃料を作るために作りませんでしたかね。

横田 ずっと戦後だよ、ねえ。

関根サ 沖縄（品種）とか、要するに工芸用に使ったんだよ、焼酎だとか。

—— 焼酎とかね。

関根サ それから澱粉。澱粉工場は家の方でもそこへ造ったんだよ。

—— しかし、澱粉工場ができたのは戦時中じゃないんですか。

関根サ 戦時中だった。（宮崎氏を指し）ここの家の裏っ側からねえ、砂利を……。

関根ヒ いやいや、戦時中じゃねえ、戦後ですよ。

関根サ 戦後かあ。

榛葉 造ったのは戦後。諸国さんあたりが、あの人が澱粉やってたでしょ？

その前にイモ商いをやってたのかなあ。

関根ヒ いやあ、ちょっとそこは……。諸国は澱粉やってたでしょ？ その前は諸国は何をやった？

横田 イモ屋やってた。食糧イモ買いやってたの。

関根サ あのお、諸国って人は関根国松っていうんだけど、鵠沼でもね、いま

の栄三さんなんかよりは古いですねえ。(浅場ヲさんを指し) このいまの家のここのなんか、やったんじゃねえんじゃないかと思いますがねえ。

浅場ヲ ですから、お爺さんのとき、諸啓って啓次郎爺さんですけど、明治にイモを関西の方へ出荷してたんです。

—— 屋号は何ていうんです？

浅場ヲ 諸啓。

横田 諸啓さん？ そうだよ。イモ屋の元祖だね、鵠沼の。

関根サ 諸国ってのはね、私が知ってからですからね。国松ってのはね、割と新しい。

—— これは、場所はどこですか？ 原ですか？

関根サ 荻田。

—— 荻田？ うん、荻田ですね。はあ。諸啓さんも荻田ですね。

横田 元(資本)があつたからやったんだ、イモ屋はよお。関西まで運んだてえんだからよお。大したもんだよ。

浅場ヲ 関西へね、汽車で、駅から。

関根サ 鵠沼ではそんなもんだけど、藤沢では他に羽鳥、それから辻堂、たくさんありますよ。仲買いは。

—— 鵠沼の仲買いは、諸国さんと諸啓さん。仲買いつていうか、出荷してた人は。

宮崎 はい。

関根サ まあだ、ほかにもあつただけんどもねえ、忘れちゃった。荻田は……。 (思い出そうとするが、なかなか出てこない) リョウチャンの弟さんがよお、トラサンとこの……。 あっちの方で諸なんとかつていう……。

浅場ヲ 何もやってませんよ、トラサンところは。

関根サ いずれ何軒かあつたんだ。

—— この、諸竹とかいうのはどうなんですか。青木豊三郎……。

関根ト 諸竹は西富<sup>にしとみ</sup>。

—— 西富ね。ああそうですか。これは西富の人ですか。イモだけを商っている。それで、鵠沼のイモはこう斜めに切って、ゴマをまぶして焼く、関西に出してて、三島のイモと競争してたということだったですけど。

関根サ これはね、私が古宮さんに話したとおりに、大正時代のことが一番、たいてい記憶で覚えてんですけどね、鵠沼の出荷も、一番多かったですね。

それで、駅へ、いまのようにトラックがねえもんだからね、みんな車力<sup>しゃりき</sup>だから、自動車つてもんがなかったから、あすこへ全部集めたんです、馬で。

—— 馬で？

関根<sup>サ</sup> 馬で。馬力<sup>ばりき</sup>で。

—— 大八車？ じゃあなくて馬車？

榛葉 はい。馬力といってね、馬に力って書くんだけど。

関根<sup>サ</sup> それでイモを積んで、仲買いが来て、それで駅へ運んだわけ。

—— 駅へ？

関根<sup>サ</sup> はい。それで畑で作って俵に詰めて、12貫ぐらいですからね、それを畑の縁<sup>ふち</sup>へ積んどくと、それで馬力へ積んで、駅へみんな持ってたわけですよ。

—— 馬力ってのは輸送をする業者の……。

関根<sup>サ</sup> 馬車です。われわれは馬力、馬力っていったですけどね。

榛葉 農家のうちの何割かは馬を飼って、やはり東北と同じで馬小屋があつて……。

—— ああ、馬飼ってましたね。

関根<sup>サ</sup> そこのトウサンのとこなんか馬力やってた……。

—— もう畑から抜いたあとすぐ俵に詰めたんですか？

関根<sup>サ</sup> そうです。

—— あれは、米の俵？ 麦の俵？

宮崎 イモ俵<sup>ば</sup>ちゅうのがある。

—— いやいや、周りはムギで編<sup>あ</sup>んだりはなかったですか？

関根<sup>サ</sup> 稲藁<sup>わら</sup>のない家は、麦殻<sup>くわ</sup>も使わないんじゃないけど、麦殻<sup>くわ</sup>ってのは弱いんですよ。繊維質がないんだから。ボロボロなっちゃう。一回ぐらいいいんですけどね。

—— 繰<sup>く</sup>り返しては使えない？

宮崎 使えないなあ、あれは。

関根<sup>サ</sup> それで、米だとかムギだとかの場合は5か所縛<sup>く</sup>るんだけど、イモ俵<sup>ば</sup>の場合は3か所つきり縛<sup>く</sup>らないからね。

—— それで詰めて……。

関根<sup>サ</sup> その程度でみんな要するに大阪へ。

—— なぜ東京はイモを食べないの？



関根サ それは俺に訊いても判んねえ（笑声）。要するに商品として……。

—— いや、みんな関西へ持ってったっていうから……。

関根ヒ 東京の場合は他にも産地があったんでしょうねえ、川越とか。

浅野 千葉なんかもある。

関根サ いずれにしてもねえ、関西へ送ったです。

榛葉 1反あたりどれぐらいイモは穫れたんだろう、12貫俵で何俵ぐらい？

関根ヒ ええと、待って下さいよ、終戦後4年目か5年目ぐらい、私が<sup>はたち</sup>20歳ぐ  
らいんときの、サツマイモの10月の供出の基準、360貫ぐら이다。1反あた  
り30俵。そのぐらいが供出の割当量ね。

横田 平均すとそうだね。

関根ヒ ですから、それ以上できれば、作った人の俗にいう余禄ですよ。そ  
れで、9月の上旬ぐらいに、早出していう供出があるわけです。そうする  
と、それは1俵で2俵に計算してくれたり、最初のうちは2俵半ぐらいに計  
算くれたという記憶も、私はありますね。

横田 それは供出だ。

関根ヒ 食糧として出すんですから、澱粉へ出すのと違いますからね。私の記  
憶ですと1反30俵というふうに記憶してます。

榛葉 確かサツマイモを食糧として米の代わりに配給したっていう時期があ  
ったですね。

—— 供出ってのはいつごろまであったんだろう。

関根ヒ 米とムギは結構後まで食管法があったですよ。それで食糧難のとき  
には、サツマイモとバレイショまで食管法に入りましたからねえ。

関根サ 配給制度があった。配給。酒は1合とか2合とかって配給貰ったで  
しょ。そのときの話ですよ。

横田 だから昭和25～6年だね。

関根ヒ そうだね。ある程度食糧が出回ってくるまでね。

—— イモに関連しては、いま、供出の話が出たんですけど、馬鈴薯、ジャ  
ガイモですね、ジャガイモは鵠沼はいつごろから始まったんでしょうか？

関根ヒ いやあ、始まったのは判んない。

—— 子どものころからもうありました？

関根ヒ いやあ、ちょっと……。

—— 大体、甘藷は南の暖かいところから来てますし、馬鈴薯は北海道みた

いに寒いところのもんですよね、鵠沼は馬鈴薯は条件としては余りよくなかったと思うんだけど、結構作ってましたよね。馬鈴薯、ジャガイモを。

関根 あのお、市役所の農産課あたりがちゃんと種を配給してくれましたからね、戦後。

榛葉 実際作ったのは戦前から……。

関根 私は戦前のことはちょっと判りません。

—— ジャガイモは子どものころからありました？

関根 ええ、ジャガイモは古いですよ。古いでしょうけどねえ、商品としては、あんまり作んなかったんじゃないかねえ。

—— 自分の家で食べるぐらい？

関根 自家用の余ったのを売ぐらいでね。マツんとこは作ったことあんか？

横田 家庭用だよ、家庭用。

関根 自家用です。

—— 種類はメークインですか？

関根 いやあ、メークインは、戦後でしょ？

—— ああ、ダンシャク(男爵)ですか。

関根 男爵つきり、なかったと思いますよ。

### \*\*\* 一面にモモ畑が広がる \*\*\*

—— じゃあ今度はモモにいきます。モモに。

関根 いやあ、モモはちょっと私にやあ判んねえ。

—— モモは榛葉さんところが一番詳しいんだろうけど、関根さんが子どものころからもうモモ畑ってのはあったわけでしょ？

関根 モモはありました。果樹っていうのはモモにしても、カキにしても、ミカンにしても、それを栽培するっていうのはそんなに簡単なもんじゃないんです。モモってのは特に剪定が難しかったですねえ。そいでねえ、難しい、知らねえものを、一所懸命、うちの親父の代の話を、私見て知ってんですけども、これが一番苦しんだです。剪定っていうものを……。

横田 モモはね、昭和16年に伐採しちゃったの。だからその前のことだからね、16年後はもうムギ専門になんの。

榛葉 昭和16年っていうと、食糧増産で、果樹はもうだめでした。果物は作ってはいけないってことで、私どもはモモ、ブドウ、まあイチジクなんかも、イチジクはあんまり穫れなかったですけどね、そういうのが畑にあったんですけど、全部伐採されちゃって、麦畑とイモ畑に変えられちゃったです。

関根サ モモが入ってきたのは、私の知っているんでいいですか？ 皆さん。ていうのは、昔、原に前田って家があるんですけどね、ヤマタネだとかチョウサンっていう家なんです。そこのチョウサンという人がね、引地から出た人なんです。その人がね、モモに袋をかけたんですよ。いまはいい袋があったりなんかしますが、昔はね、雑誌を引<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>ば<sup>ば</sup>いてね、そいつを糊で貼って、それであの（手元の紙で実演してみせる）、こういう袋を作ったんです。モモの袋ってのはこういうふうにモモにかぶせて……。こうやって、ここんとこに切れ目が入っていて、琉球って畳表、あれをね引<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>ば<sup>ば</sup>いて、ここ結わえたんですよ。それをねえ、チョウサンがやったもんですよ。

横田 袋かけにねえ、袋は買って、縛る紐は琉球なの、琉球を裂いてそれをつけて縛るの、袋が落ちないようにね。だから大変だったんだよ、やっぱこれも。

関根サ そのチョウサンて人が、六郷から持ってきたって話を聞いてた……。—— やっぱ六郷。

関根サ ということはねえ、六郷ってのは文化の発信地ですよ、東海道の。その当時は東海道、いまの1号線があるでしょ？ あれが交通のあれですよ。—— これはやっぱり明治の中ごろですよねえ、チョウサンっていうんですか？

関根サ 前田チョウサンってのが持ってきたって話だ。

—— じゃ、その人がモモを持ってきただけでなく、そういう技術も持ってきた。剪定や……。

関根サ 剪定はね、神奈川園芸っていう会があって、上<sup>うえ</sup>の方の試験場に事務所があったんですよ。いまの園芸試験場、そこで剪定技術を教えてくれたの。私なんかも行ったよ。行っちゃあねえ、摘果のチョウカスだとかチュウカスだとか、花芽を作るカイジョウケイの剪定整枝だとかを教わったの。モモ作るにはねえ、潮風だとか西風でここは……。原っぱで何にもないときは、風が一週間も吹くと砂丘ができちゃうんですよ、砂丘が。それで藁やったり麦殻やったりなんかして風除けをやるんですけどねえ。それで、モモを植えても

ねえ、その風でだめんなっちゃう。それで松の木の並木を、だから鵠沼の景観てのは松並木の、それでモモの風除けに松を全部植えたの。他の木を植えても、全部だめんなっちゃうんです。

—— で、チョウサンて方は鵠沼に住んでらっしゃったんですか？

関根サ ああ、菓子チョウさんって言って菓子屋したりなんかしてて、前田<sup>みょうじ</sup>って苗字です。

—— この、加藤徳右衛門さんの『藤沢郷土史』という本の中には、傾斜地の方がモモはいいって書いてあるんですけどね。

関根サ それはね、ブドウでもモモでもミカンでもそうですよ。甲府へ行ってみても、山の上の方へブドウの方が、巨峰だって旨いですよ。やはり高いところの方が。湿気地のところの方が水分多いです。と、糖分ていうのはやっぱりね、果樹にかぎらないけど。

榛葉 浅場さん、モモ畑を尼寺さんのそばに作ったっていいですけど、あそこは土地が割と低かったんじゃないですか？

浅場マ まあ、それに近えな、本当の乾燥地じゃねえよ。

榛葉 それと、本鵠沼駅の東側の丘陵。

—— いわゆる新田山<sup>しんでんやま</sup>から高松山にかけてですね。

榛葉 あすこは時期にはお花見したぐらいにきれいだったっていうんですけどね。モモの袋かけをするのに、あの山の傾斜地だと、袋かけを砂山で座ってかけられたっていうんですよ。一本の木の頂上に近い方は、座ってかけてたっていうぐらいだからね、そこで楽しんでたんでしょうけどね、いいモモができてたらしいです、あの山は。で、お花見するなら本鵠沼の山を……。

—— 遠くから見れば、一面モモの花盛りだったわけですね。

榛葉 あの丘陵ではいいモモができたらしいですけど、それもやはり砂の丘陵ですからね、寿命があったと思うんですよ。肥料はどういう肥料をやったか、おそらく干鰯とか大豆粕を。

関根サ あまり化学肥料ってのは当時なかったからね。有機肥料、現在でいう有機肥料ですよ。

—— モモなんかやっぱり、肥料はやるんですか（笑声）。

宮崎 甘みが違うからねえ。

榛葉 それと、甘みを増すには傾斜地の方が、水はけのいい方が甘みが増して、最高のモモができたらしいです、あすこは。例えば宮崎通りってのがあ

りますねえ、あすこに山があるでしょ、それは私のお爺ちゃんの弟が作ったモモ畑ですけどね、明治神宮で品評会があつて、金杯の賞を貰ったといつて、いまだにその賞状があるらしいです。そのお爺ちゃんは、私の祖父の弟なんですけど、とても器用なんですよ。モモでもカキでも接ぎ木を上手にするお爺ちゃんなんですけど、私の祖父はモモをつかむにも力が入っちゃつて、このモモを市場に出荷すると、軟らかいモモですから腐れモモだつていわれちゃつたらしくてね（笑声）。弟の宮崎庄三郎さんは、いいモモを作つて品評会に出しちゃあ、葉山の御用邸で天皇が食べたつていうんですよ。

—— それで種類は何だつたの？

榊葉 いわゆる白桃<sup>はくとう</sup>だけど、水蜜桃<sup>すいみつとう</sup>という言葉を使つてましたね。

関根<sup>サ</sup> 白桃<sup>はくとう</sup>つていう言葉はねえ、専門家のいう言葉だけど、ここで作つたのはねえ、橘<sup>たちばな</sup>早生<sup>わせ</sup>つていう、これ、だからいまの話ね、みんなあの六郷（旧橘郡）の方から来たんですよ。モモの産地<sup>つづみ</sup>つていうのが……昔は都筑郡か？

—— あ、都筑郡、はい。

関根<sup>サ</sup> あつちの方から来たんです。橘早生<sup>たちばなわせ</sup>だとか……。〔注2〕

—— 多摩川沿いですね？ 都筑郡てのは。

関根<sup>サ</sup> それからね、甘くて一番極早生の、何ていったつてな、小さくて種が割れちゃうやつ、あれが旨かつたんです。極早生で。それから天津<sup>てんしん</sup>つていうのがあつたんです。

—— 赤の、中が真っ赤で……。

関根<sup>サ</sup> ええ。天津<sup>てんしん</sup>つていう堅いモモが。天津か水蜜桃<sup>すいみつとう</sup>かつていうぐらい。

榊葉 水蜜桃<sup>すいみつとう</sup>を箱に詰めるときはですね、その香りでむせるくらいに、もう私は小学校以前からの記憶で……。

関根<sup>サ</sup> その品種<sup>しんしゆ</sup>つてのはねえ、いろいろあつから……。天津と水蜜桃<sup>すいみつとう</sup>、この二つはあつた。

榊葉 それは水蜜桃<sup>すいみつとう</sup>の香りつてのは最高ですね。もう、モモがよく熟<sup>う</sup>れると香りがいいでしょ？ あの熟<sup>う</sup>れる寸前の本当にいい香りが、完熟した……。兄弟で、兄貴の出したのは腐れモモ、鎌倉市場でね。弟の宮庄が出したのは、御用邸に納めるようないいモモだつたつていつてね。そういう評判を鎌倉の市場から聞きましたからね。

\*\*\* 40～50年つづいた養蚕 \*\*\*

—— モモはそれじゃあ、これぐらいにして、じゃ、養蚕、蚕。蚕は、さっきちょっと話が出たけど、鵠沼で飼ってる家ってのは、蚕室ってのがあったのですか？ 蚕の。

関根サ 私が子どもんときにちょっと、二階が蚕室なんだけどね、ちょっとやったのを見たことがあるんですよ。そんなふうで、まあ、何年だったんだかなあ、そんな永い間じゃねえ、後の方っきり知らないんだから。

榛葉 いや、永いことやったでしょう。あの浅場さんの蚕室があったでしょう。立派な蚕室だったっていうけれど。それだけ資本を下ろして蚕室を作るぐらいじゃ、ね、3年や5年、10年でやめるような養蚕じゃなかったんじゃないですか。

浅場リ でも、お婆さんの時代にはもうやってなかったし、その前の代か、その前ですからね……。

関根サ 養蚕の歴史は短いです。

—— でも養蚕試験所があったっていいですね？ 日本精工のところに。

関根サ 試験所があったからって、養蚕が盛んだったってわけじゃない。

—— しかし、会社があったでしょ、製糸会社が。

関根サ 製糸会社はここにはないですよ。それであの、長後に秦野さんか？

川口さんだ。川口製糸、あれがね、はっきりしてるのは。私が20歳<sup>はたち</sup>ごろまではあったね、製糸工場が。

—— ああ、そうですか。石上の方にもあったって話ですね。

関根サ 石上じゃなくてねえ、いまの市役所、若尾山。あそこは若尾幾太郎の製糸工場です。

—— 20歳ぐらいっていうと、昭和ですか？ 大正ですか？

関根サ 私？ だから昭和の初め。

—— 昭和の初めごろまでは長後の方に製糸工場もあったし、若尾山にもあった。

関根サ 若尾山のはとても永かった。

榛葉 明治19年だったか、さっきいったモモのお爺ちゃんが、19歳のときにいまの関根さんと同じような大きな家を造ったんですよ。それは養蚕のために作ったっていうんですよ。中二階、三階までありました。その前から養蚕

やってて、蚕室だけじゃ狭いからって、母屋を使って養蚕をやったと思うんですけど。ですから明治の初めには養蚕は盛んで、明治時代、大正にかけてまでは、おそらく40～50年はやったんじゃないかと思いますよ。

—— 関根さんとこの蚕室ってのは、どのぐらいの広さだったんですか？

関根サ そうだね、20坪ぐらいだね。

—— 20坪。ほう、じゃ40畳敷きですか。それで、蚕を實際飼ってるのを見た記憶はないんですか？

関根サ 薄々は知ってる。文久2(1862)年生まれのお婆さんがやってるのを見たことがあるような記憶がある程度。

榛葉 私はいまの自宅でやったって記憶がある、別棟の蚕室でなくてね。

—— 二階が蚕室になってる。

榛葉 それはもう、二階だけじゃなくて、一階まで使って、蚕さんの糞が落ちると、藁草履で部屋へ入って行くんだけど、その糞が藁草履の裏へ付いちやうんですよね。敷居でもってこすりながら歩いたり。

関根サ 事実の話なんだ。おかしいけどね。

榛葉 ですから、いま現存してる関根さんの母屋、あれは完全な蚕室でもって、あれだけの立派なものを、蚕室と住居専用で造ったんじゃないかと思うんですよね。となると10年や20年の歴史じゃなくってね。40～50年はおそらく……。

関根サ 蚕ってのは温度がいるんですよ。炭火で暖めたりなんかしてね、低温なんでそんなときに住宅を使った。専門的には蚕室を造って、そこでやると……。人間が住んでんと多少はいいけど、なんにもねえとうんと燃料がかかんですよ。

榛葉 いまだに、私の娘が嫁に行ったところでは養蚕を事実やってますけど、蚕室っていいまして平屋で造って……。

—— 寒くなるっていうと、秋に飼う？

関根サ そう。

—— 春は飼わないんですか？

関根サ 寒いときには飼わない。

—— と、鵠沼は秋ですね。

榛葉 いえいえ、やっぱり春からです。

—— 春蚕・秋蚕……。

榛葉 1年に3回か4回、いまだにやってるんですよ、相模原で。それだけに蚕室は平屋で二つあります。一つは温度が調節できる部屋で、とりあえず種を孵化して育てる。それが大きくなったら別の蚕室に入れる、いまだにやっていますけどね。

\*\*\* 7網あった大正末期の地引き網 \*\*\*

—— 最後に地引き網の話をお聞きしたいんですけど……。地引き網は、江戸時代の記録があるぐらい昔からやっていて、明治のころは九つ、大正の末期は、七つの網元があったというんです。新網ってというのは、これは荻田にあったっていうんですけど、何という家がやっていたのか……。

横田 あのね、新網は清水です。

—— ああ、清水ですか。

横田 それとね、新開網<sup>しんかい</sup>がね、やはり清水です。いまひとつね、キス網ってのね、やはり清水です。

関根 ヒ これも清水かね？

横田 そう、清水に3軒あったの。だけどね、この3軒はね、この新網って私の家<sup>うち</sup>なんですけど、3年か4年ぐらいつきり、5年やったのかね。それからキス網は、昭和の2年ごろね、やめちゃったんです。

関根 ヒ キス網、日比さん家<sup>ち</sup>の……。

横田 それとね、大正網ってあんでしょ？ 大正網も昭和ははじめころ、やめちゃったんですね。

関根 ヒ 時期と数字のことはだめだってよ。忘れちゃって。

榛葉 大正末期は7網、昭和3年に6網、5年に5網、12年には4網に減ったそうです。いまは堀川網だけが年に100回くらい網を入れて、観光用として残っています。

—— 大正網は大東の森井正吉さんでいいんですか？ この網元はね。新開網、これは清水の関根さん、キス網は横田さんどこですね？

関根 ヒ いや、日比さんでしょ？

関根 サ あの、日比だよ。

関根 ヒ マッチャンさあ、このキス網は日比さんでいいんでしょう？

横田 もう住んでないけどね。何処か行っちゃってますよ。跡取りがね。



大正末期の網元（横田松良氏ほかによる）

|         |      |       |    |                     |
|---------|------|-------|----|---------------------|
| 元網(学校網) | 荻田   | 内田    | 久蔵 | 鵜沼3565(本鵜沼 5-13- 5) |
| 新網      | 清水   | 横田    | 信吉 | 鵜沼1156(本鵜沼 5- 6-15) |
| 新開網     | 清水   | 関根菊次郎 |    | 鵜沼3274(本鵜沼 5-10-21) |
| キス網     | 清水   | 日比卯之助 |    | 不詳                  |
| 高網      | 鵜沼海岸 | 高橋治之助 |    | 不詳（現在は辻堂の小沢）        |
| 大正網     | 大東   | 森井    | 正吉 | 鵜沼3148(本鵜沼 1-15-16) |
| 堀川網     | 堀川   | 葉山    | 岩吉 | 鵜沼3778(本鵜沼 3-11-37) |

関根 新網が横田さん、新開は関根でいいんでしょう？

横田 そうそう。

関根 新網が横田さん、清水の。で新開が清水のやっぱり関根さん。キス網も清水の日比さん。高網は？

横田 この人はねえ、鵜沼海岸のね、公民館のそばにいたんですね、当時。

関根 誰？

関根 高網。

横田 高網って網を持ってる人はよお。

関根 あれは辻堂だべ、高網は。日の出橋行ったとこ。

横田 あれはね、鵜沼の権利を買ったの、その人は。だからね、海は鵜沼の海つきり掛けられないの。その人は辻堂で、もう、あの、代替わりになっちゃってねえ、いまは小沢っていう人が高網っていう名を……。

榛葉 辻堂に残ってるんですか？ まだ、高網？

横田 やってます。

—— もともとは鵜沼海岸だったという……。

横田 そう。元は鵜沼の権利を、辻堂の人が買ったの。だけど、辻堂の海には掛けられねえんだよ、規則上で。

—— 辻堂の人が買った。

横田 そう。

関根 小川さん？ 小沢さん？

横田 小沢さん。もう、3代目の人ですよ、その人は。

—— 海岸にいた人は、何という名前……。

横田 だから、高網、高網っていうから、高橋っていう人かなあ？

—— 横田さんとこの一番最初に地引き網をやった人は何ていう人ですか？

横田 ええとね、横田信吉です。

関根サ この人の親父だよ。

横田 だけど私が地引きが嫌いだからね、やっぱり……。

—— 明治の9網のなかの東網ってのは知りませんか？ 大東にあったというんだけど……。

榛葉 だから、それが関根佐一郎さんところ。

—— ああ、これが関根さん。

関根サ 俺んとこはもっと古い話なんだぜ、これはもう最近の話なんだ。

—— 網元ってのは、網を必ず一つは持ってるわけでしょ？ 網元ってぐらだから。その網ってのは大きさはどれぐらいの網なんですか？

横田 あのねえ、大きさはね、そこの家によって違うんですがね、大体ね、5丈あんとしんでしょ？ メーターがね、350メーターぐらいあんの。まっつぐにしんと。

—— え？

横田 真っ直ぐに延ばすとね、350メーターをこうやって折るから（紙を折ってみせる）、だから半分でしょ？ それを沖へ張るときはね、真っ直ぐ張ってくるの。江の島の方から辻堂の方へと真っ直ぐ張ってくるでしょ？ だから、海岸が狭くなっちゃうんですよ。沖が、ね？ そうしんと、舟がいっぱいあっても掛けられないでしょ？ これ掛けちゃうと。ところがねえ、700メートルぐらいの距離を二つ繰りも引っ張るとね、網がこうなって来んの。沖のうちに、ね？

—— それは舟で引っ張って来るんですか？

横田 こうなって来んと、これ、引っ張ってんからね、そうしんと今度、次の舟が、ここがちっと空いたからね、ちっと余計網を出して、こう掛けんのね。また、こっち側<sup>かわ</sup>の人は、ここまで持ってきて、舟をね、そんでこうやって網を下ろすの。そうやってやんと、数が掛かんのね、で、もう樽が上がるでしょ？ 樽が上がると、もう沖がガラッとしちゃうでしょ？ そこへ行ってもた掛けんでしょ？ と、魚あ見て大変なんですよ。舟が多いから。メーターが350メーターぐらいある網を引っ掛けんだからね？ イワシなんて来

んとね、イワシがここに見えるっていうの、漁師は見つかるのね。それを見て掛けるんですよ。今度は競争なの。イワシが来る時期はね、3時ごろになるとねえ、沖へ真っ黒くなってくんですよ。それが来るかって思うと……。

—— 朝の3時？

横田 夜。夜じゃないや、昼間の。

—— 昼間の3時？

横田 昼間の3時ごろになんとねえ、イワシが沖から来るんですよ。それがまた、判んの、漁師は。色んな舟が出てね、沖を睨んでてね、目の早い者がその魚あ捕まえちゃうんだ。で、こうやって掛けて来んだけどね。まあ、腕っこだよ、艀を漕ぐのは。当時5人で、五丁艀だからね。大体は舟に8人は乗ってんですよ。それで陸にはね、12~3人いるんですよ。だから人は18~9人いないとね、そのイワシの網は重たくて引っ張れないのね。やっぱり20人からの人数が必要なのね。だけど、鵠沼の人がね、家の近所に3軒あんだよ、網元が。大変には大変だったね、うちの親父もね。だけど、アジがあんときは朝早くあんとときがあんの。そういうときはね、アサマズミせってね、朝2時ごろ起きて行くんですよ。暗いところ行って舟下ろして、隣の舟、来やしねえかなって思ってね、地い這いずって、灯りい点けん<sup>ち</sup>と見つかっちゃうから（笑声）、灯り点けないでね、真っ暗闇をこうやってナモト（波打ち際）歩って行くと、まだ来てねえやへって、そんで舟出してね、2時ごろもう、網は下ろすんですよ。早い方のアジがあんときはね。そんだってそんなに沢山ないですよ。いまでいう籠でね、センザイ籠って野菜の籠あんでしょ？

榛葉 ヨコシマ（魚を入れる竹の皮で編んだ籠）。

横田 ヨコシマは知ってんけど、他の方は知らねえからいうんだけどね、その籠で5杯もありゃあ「多かった、多かった」っていうんだよ、5杯もあれば。それが今度、朝早く引き上がんでしょ？ 今度、荷を捌かすにね、この辺の人が三日ボテエ（棒手）ってね、籠で買いに来るんだよ。その人たちが15人ぐらい、昔ね、その人たちが全部処分して、そこの場所でね、仲買人が値を付けて持って帰んだけどね、車が当時なかったときはね、大変だったのね。家のお爺さんもね、横浜まで、市場まで担いでいったって夜あんの、大したもんだ、随分力があるもんだねえ。

関根サ このことが大事なんです。この課題にね、いまの説明してる、このことが。現金収入っていうのはね、半農半漁、せって鵠沼の生活状態っていう

か、経済状態でいえば、いまのマッチャンがいった担いで行ったってことが一番問題なんですよ。

榛葉 そこであの、いわゆる一網やって、魚が沢山とれる、ヨコシマで10杯とれたのを、ボテエがそれを全部持ってっちゃうんですか。

横田 仲買人がねえ、やっぱり仲買人がいんの。家の網には誰が仲買いってねえ、立ててあんの、その人に。だから網主は、そのまんままた漁に出ちゃうの、だからその仲買人がごちよごちよするんですよ。でね、いまの話のとれた魚の金額はね、四分六、へってね、六分が曳き子が分けんの。四分が網主が貰うの。その中にもまた、腕のいい若い衆がいるでしょ？ そういう人たちには六分の中からの<sup>ひとひちはん</sup>一尋半っていうの貰うの。一尋半っていうのは<sup>いちにん</sup>一人半なの。一人半の収入になった金額を、分けて貰えるわけなの、その人は。

榛葉 それをシロワケ（代分け）というんですか？

横田 そうそう。シロワケというのはねえ、当時50円取ったとしんでしょ？ そうすつとそれをその場でもって仲買人がその金を持って来んですよ。

—— はあ、現金で？

横田 現金で。曳き子は現金なの。で、網主が一杯吞ませて、そこで計算して、10人なら10人で平らに分けた、平らに分けたその分の、一人半っていう人は船方、まあ船頭だね、その人はもう、常時来てんからね、あとの人は「俺、今日はイモ掘りだから行かれねえよ」っていうね、曳き子もいるわけだ。だから、決まって何人来るってことはないの。だけど来る人は、家の兄なら家の兄、来る人は決まっちゃってんのね。その人たちがポコンと休んじゃうときがあんでしょ？ そうしんとそのとき、収穫があるときがあんの。「とれたよお」っていうとねえ、「じゃあ、<sup>あした</sup>明日行くべえ」って「浜の<sup>あした</sup>明日」っていうの。「今日、とれたよお。明日行って下さいよ」ってふれて来んでしょ？

そうしんと「じゃあ行くべえや」って来てくれんのね、そしたらその日に魚がとれないときがあんのね、そうすつと「ああ、今日はだめだった。浜の明日だな」って、「<sup>こうや</sup>紺屋の明後日と<sup>あきって</sup>浜の明日」ってね（笑声）。紺屋の人は「明後日ならできる」っていう。地引きはねえ、とれたから出てきて「今日はだめだった」へって「おめえ、浜の明日だなあ」っていう、そんな言葉があるんですがね。まあ、でも大変には大変だったね。人を集めるんだから。

関根<sup>うようば</sup> その漁場の構成っていうのはねえ、いま話したとおりの、そういうふうな具体的な話なんだけど、構成ってのはねえ仲買いってのがあるんですよ。

この人（横田氏のこと）は網元なんですけど、網元は網元、仲買いってというのは要するに事務所だね。そこへ寄って、仲買いって人がいまでいう事務的な仕事をするんですよ。網主がすんじゃねえですよ。

榛葉 いわゆる漁師、曳き子について、寄り場ってのがあって……。

関根サ 寄り場、寄り場。仲買いじゃなくて寄り場だ。

榛葉 寄り場って言葉があって、各集落に何軒かあるんですよ。原にも2軒、1軒は寄り場っていう名称を使って、いまだにその、森井さんは使ってますけどね、それはその家に寄って、シロワケを始めるんですか。

横田 そう。

関根サ あれは俺んとこ寄らずに、東網の寄り場なんだ。

榛葉 なるほど。

—— その網元ってのは一つの権利ですけど、それは売買できるんですか？

横田 いや、売買はできんけどね。いま辻堂で売ってえ人がいるんだ、ところが辻堂の人でなきゃ買えないの。鵠沼のとは鵠沼の人でないと、鵠沼の漁師は、堀川網がいまやってんけどね、堀川網を辻堂の人が買ったら、いうことを聞かねえんだよ。だからね、売り買いなかなかつかないですよ。

—— では、元々はどうして網元になれるの？ 一番最初は。

横田 最初はね、そういう規則がなかったの。規則が始まったのは、やっぱり大正の初期、後でしょうよ。昭和になってっからうるさくなったの。

関根ヒ 早くいえば腕っ節の強いのが、または財力があんのが、若い衆集めて網を張ってたわけ？

関根サ 私のお婆さん、文久2年生まれのお婆さんの兄貴って人がうちの最初の東網だったんですよ。それでねえ、辻堂だったの、辻堂の東網。9網のうちの一つだったの。

榛葉 身売りができたんでしょ？

関根サ 昔はできたんだね。だけどね、このごろいうのはね、漁場の地域、漁区の問題もあるんですよ、辻堂の分と、片瀬の分と、境があるわけです。そのところを権利を何々は持ってましたっていうこと……。

榛葉 横田さん、いま五丁艦って聞いたけど、本当にいまあるような舟でも5丁艦を掛けたんですか？ 五つも艦を付けられたんですか？ いまの舟にも。

横田 あれはね、前の二人が四丁艦と五丁艦っていうのね。その次に二人で

漕いでんのはね、前艚<sup>まえらま</sup>、前舵<sup>まえかじ</sup>とも呼ぶけど、それと脇艚<sup>わきら</sup>っての。それで、一番後ろで一人で漕ぐのが艚<sup>ともろ</sup>っていの。その艚漕ぎが舵を取んの。舵を取んと、次に二人で漕いでんのがね、前艚と脇艚っての。これがやっぱり舵取る、威勢が付くとね、舵がなかなか切れなくなってるんだよ。そうすると脇艚と前艚の人が舵を手伝うの(櫓の図は57ページ参照)。

榛葉 五つある？ それとも三つなの？ 艚は。

横田 艚は5つあんの。五丁艚って。

榛葉 なるほど。脇に、前後二つあって四つ。後ろに一つと。

横田 そう。その一つが舵を取んの。

榛葉 いまの堀川網が使ってるような舟で、五丁艚も付けられるのかと私は思ったんですけどね。

関根 いまの堀川網が使ってる舟で、5人付けられたの？

横田 いまの堀川のあれ、タイやなんかとるやつ？

関根 舟の大きさ。

横田 舟の大きさは変わらないよ。チョビットつきり変わんねえ。

—— 網元ってのは昭和になってから権利としてできたんですか、網元は。

横田 いえいえ、昔っからあったんです。新開網ってあんでしょ？ 新開網の籠の印がねえ、人という字を書いて、互い違いに人という字を書いてね、その中に十と書いたの。人十人、ね。人十人で、鵠沼地区の地引き網を、始めたんだそうさ、ね。だから、関根で持って結局大将になっちゃったんだよ。その十人の中で。その十人の中から分かれてきて、新規に始めたんだね、永くやってんと、俺は別個<sup>べっこ</sup>になんべえってのが出てきて、一つひとつが分かれてね、だからその時分は自由だったんだね。随分古いんですよ、この関根のね、網主は。今日ね実は息子に訊ねてきたんですがね、「この話があるんだよ、お前ん家どうだったよ、」へって訊ねて、「俺も何年だか判んない」ってそういうんですよ。それで、何代前はやっぱり判んないって言ってましたよ。ところが家は、籠の印が人を合わせて十だって。

—— こういう形？

横田 ええ。あの、井桁<sup>いげた</sup>でね、出てない部分があんわけだね。中に十と書いてあんのね。そのグループで地引き始めたんだそうですよ。だから、あとの人たちは適当に始まったらしいよお、その中の人たちがね。

\*\*\* 新田と納屋の関係 \*\*\*

—— 最後にね、網干場の話と新田<sup>しんでん</sup>と納屋<sup>なんや</sup>の関係……。新田から鵠中<sup>かた</sup>の東っ方の山の裾のところを通ってる道がありますよね、あれ、新田道っていわれてんですが、あれが網干場で、新田の人が漁に海へ行くときに通った道だっていわれてるんですよ。それと、鵠沼海岸からずっと西へ行ったところに納屋って地名があるんですよ。その納屋は網や道具をしまっておいたところだっていわれているんですけど、新田の方の人のそういう利用をした場所なのか、それとも荻田とか清水の人が使ったのが納屋であるのか……。

横田 当時はこちらなんかは、みんな道具を家へ運んじゃったね。

浅場マ 納屋は新田の人ですね。

—— 新田の人ですか。納屋は。

浅場マ 海へは遠いからさ。

榛葉 納屋の通称は、山口茂平さんあたりが、あの辺を納屋というんですけど、あすこへ出た時代が、明治以前のどのくらいになんのかね、それ以前に網を持ってた新田の人が、納屋を構成したってわけだからね。

—— だから9網時代から、だからここにある7網以外にあったろうってことですね。

榛葉 それは何年だろう。

—— ですから、あすこの八木さんだとか、いまの山口さんだとかは新田の出ですよ。

榛葉 それで新田宮<sup>しんでんみや</sup>ってお宮があすこにできてるんですよ。新田の人も含めて、あすこのお宮を管理してんですよ。で新田宮。出た時代を遡れば……。そうでしょ？ 新田宮の土地の権利は、新田の人と納屋の人と含めて守ってるでしょ？

—— そう、いま、両方で守ってるんですね。

榛葉 ということは、納屋はあくまで新田から出た人だってこと……。ね。

関根サ それは出たことは出た。もっともね、もともとが鵠沼じゃ、歴史は一番新しいからな。

—— そうそうそう。

関根サ 皇大神宮の周りと違って、新しい。

—— そうそう。新しいの。

榛葉 だから堀川と違って納屋は、後<sup>あと</sup>から来て、堀川の中に入ってますよね。  
—— 堀川ってのは網やってんですか？

浅場マ てのはねえ、本村の人が網やらないのはねえ、経営面積が広がったから、漁師やらなくても生活ができたのよ。納屋の方の人は、畑が狭いでしょ？ だから経営面積が狭いから、いやでも海行かなきゃならなかったのよ。家のお婆さんのときはね、江の島沖でタイがとれたのよ。仲買人は全部それを引き取る義務があったわけ。いまの時代と違いましてねえ。だから家にも大きい半切り<sup>はんぎ</sup>りが、半切りってねえ、塩水を入れとく大きな樽。一晩中漬けといて、仲買いにね、担いで持ってかして注意したらしいんだな。それが横浜に市場に行く専門家がいたらしい。一晩中やって朝早く持ってって、市場へ間に合うように持ってかしたらしい。

—— まだ話は尽きないようですが、一応このあたりでまとめたいと思います。どうも長い間ありがとうございました。

(出席者の似顔絵は岡田哲明、録音テープ起こしは渡部 瞭・両会員による)

~~~~~  
注1 戦前に関東で栽培されていた食用甘藷の品種は、紅赤<sup>べにあか</sup>・太白<sup>たいはく</sup>・花魁<sup>おいらん</sup>の白色系3種が主流であり、黄色系の金時<sup>きんとき</sup>も人気があった。工芸用甘藷の品種として沖縄100号・茨城1号があったとある(日本芋類研究所のホームページ)。このうち、紅赤と太白は現在でも若干栽培されているが、花魁は絶えたと思われていた。ところが平成5年、千葉県佐原市の少数の農家で花魁が栽培されていることが判明した。太白と花魁の違いは、太白は芯まで白いが、花魁は芯の部分が紫色になるそうだ。とすると、太白と花魁は同じ品種ではなく、本赤というのは紅赤のことか、あるいは紅赤系の品種ではあるまいか。

注2 白桃<sup>わせ</sup>は明治34年に岡山で開発された品種。橘早生は開発年代は不明だが、その名から橘郡(現在の川崎市一帯)で開発され、栽培されていたと考えられる。大正13~14年に神奈川県農事試験場が白桃と橘早生を交配して白鳳<sup>はくほう</sup>という新品種を開発し、これが今日に至るモモの主流品種の一つとなる。水蜜桃というのは、特定の品種名ではなく、軟らかく甘味が強い大粒のモモの総称のようである。従って関根佐一郎氏の少年時代には、鵠沼では水蜜桃として白桃と橘早生の双方が栽培されていたのではあるまいか。



## 「資料」昔の鵠沼浦での地引き網漁

今回の座談会での新証言を加え、前座談会、故丸山久子氏の収録資料、その他の資料により、昔の鵠沼浦における地引き網漁について纏めた。

資料編集 会員 内 藤 喜 嗣

### ◎鵠沼の地引き網の始まり

ここ湘南海岸は相模川から出た白砂が強い西風に煽られて、江ノ島、片瀬の山までにできた砂丘地帯で海は遠浅で滑らかな海底で網が引つ掛かることがなく、今から400年も以前の江戸時代から地引き網が盛んに行われていたことが茅ヶ崎の旧家の古文書に見られる。

昔の鵠沼での地引き網を一寸振り返ってみると、鵠沼の地の南部は江戸時代から鉄砲場と呼ばれ、幕府や明治政府の鉄砲や大砲の試射や訓練が行われていたように、つい最近まで砂丘以外何も無く、作物は殆ど採れなかったし、上の田圃も引地川の氾濫や時化による海水の逆流で塩害を受けるなど、旧村落の人は大変貧しかった。そこで名主達は一里(約4 km)先の海に出て日銭の上がる地引き網漁を始め半農半漁の村落にした、したがって昭和のはじめまで通り名として網元をムライモン(村右衛門は名主のこと)・カブチャと言っていた。

ここで今回の座談会の証言で注目すべきは「本村の経営面積の広い名主は漁業をやらなくてもゆとりがあったので網元にはなっていない、海よりの人は田畑が狭いから、いやでも海に行かなくてはならなかった」ということである。そして地引き網の始まりは、何代前かについては、はっきりしないとしながら清水の関根家の新開網の浜印(網元の家紋や印紋ではなく、網元が浜で使う、後述のシラボウ、ウキダル、ヨコシマ<籠>、アンバリ筒等に付けた印し)「人十人」に見られる人、十人で鵠沼地区の地引き網を始めたそうで、その十人の中から別れて、新規に始めた。要するに腕っ節の強い、また財力のあるのが、若い衆集めて網を張った訳で、その時分は自由だった。

余談だが、網元の登録、認可、漁場の制限が成されるようになったのは、明治35年7月に施行された漁業法により、県知事の管轄のもと沿岸漁場の区画を定め、地元漁業組合の設立を奨励してからである。

こんな訳で、鵠沼の網元は旧東海道の南、万福寺の檀家や皇大神宮の氏子地区の村落、宿庭、清水、荻田、堀川、新たに開発された大東、仲東、新田の村落に点在していた。

そこから富士山にかかる雲行きや海の具合、トリヤマ(ナムラで跳ね上がる魚を捕ろうと鳥が沢山舞っていること)を見て、またシラセ

オカケル（浜の見張りから魚が寄ったと知らせて来る）で引き子（フナカタとも言ふ）を呼び込んで漁に行ったそうである。

現在は一番南の網元、葉山さんの堀川網だけになったが、それでも海までは2 km強の上にある。（網元の印紋、浜印とも ㊦ である）

#### ◎網元について（別表資料参照）

皇国地誌 相模国高座郡鵠沼村（明治12年2月1日編成）

総関 神奈川県令 野村 靖

編纂主任 御用掛 星野東作の文中に

平民 式百九十七戸の内 民業 農ヲ業トスルモノ式百十二戸

漁ヲ営ムモノ七十戸

舟 漁 九頭

とあり

網元を中心とした地引き網の組織が9つ在ったことが記されている。

座談会でも明治期は9頭、網元が在ったことが語られ、辻堂から来た東網（大東の関根佐一郎）と納屋に在った網（名、所有者不明）がなくなり、大正期は7頭となった。

その後、高網の高橋治之助（現在は小沢に譲渡され操業）、新開網が辻堂に移り、戦争中にはモトアミ（元網または学校網といった）、シンアミ（新網）と現存の堀川網の3網だけになった。

地引き網の譲渡については、先の明治35年以降の県知事の免許制の権利にとどまらず、舟、網、引き子を含んだ組織の売買でなかなか成立しなかったようである。

ここに明治36年4月6日に高座郡鵠沼村字南宮越（旧清水）1177番地の関根總四郎が得た、神奈川県漁業許可證の木札の内容を記すと、第2623号 地曳網漁業 漁獲物種類 鰯（鰯）鰯ヲ主トシ其他雑魚 漁業時期 自一月 至十二月 漁場 鵠沼浦地先 許可期間 許可ノ日ヨリ満三年 とある。

先の網元の印について資料のある元網に沿って説明すると、家紋は斎藤元右衛門の持網であったので「下がり藤」である。元網は沼津から網を仕入れたので景品として問屋がよこした大漁旗に網元、元網の



紋が記されている、この紋のついたのぼりを家に立てる。浜印は「㊦」でシラボウ、ウキダル、ヨコシマなどに付けていた。

網元は村の衆を引き子としてある程度配下にしており、また浜男という目の利く物見も抱えていた。仲買人は殆どが専属で事務方も任せられ、日銭が必要な引き子のシロワケ（その日の収穫の分け前の分配、後述）の便を図っていた。

### ◎漁場のこと （鵠沼浦の漁場の図参照）

鵠沼浦の漁場は昔は片瀬村との境（鎌倉郡との郡境）で片瀬の分と区切り、西は引地川の河口で辻堂の分と区切っていたが、引地川が台風や冬から春にかけての季節風で河口が東に蛇行することから漁場が狭まるので、大正期になり固定するための話し合いを行い、海軍が射撃の標的に赤土を積んで造った築山、通称赤土山（アカッチ、現湘洋中学前）の前浜を区切りとすることに決着した。しかしそれは陸の上のことで、片瀬の浜は西を、鵠沼は南を、辻堂は南東を向いているので、少し沖に出れば網場は重なり、同じ魚群をねらうことになりイドミ（イゾミとも云って腕こきの者が櫓を漕ぎあって争い、先に出て網を掛ける）が始まり、時には片瀬とは出入りに発展することがあった。

### ◎昔の地引き網舟について （昔の地引き網舟の図参照）

地引き網舟には帆柱はない、舳先をメイシンと云い、一番前がミヨシ、ドウノマ、網ノマ、トモの4間からなっている。大きさ、型は今と変わらない、昔は5丁の櫓で漕いだ、今は1～2台の船外機で動かしている。

前の左右の櫓がスチョロ（四丁櫓）、ゴチョロ（五丁櫓）で主力櫓で腕節の強いのが二人ずつで漕ぐ、網の間の左右はメーロ（前櫓）とワキロ（脇櫓）といい、補助櫓で推進と舵の補助を行い、網打ちの際には、クダリの時はメーロ、ノボリの際はワキロを上げて網打ちを行う。後のトモロ（艫櫓）は舵取の櫓で通常船頭、頭領が漕ぎナムラを求めて舟を操る。

五本の櫓は、それぞれの役割にあった機能に応じた造りになっていて、専門の櫓大工が造る。スチョロとゴチョロは長さ、幅は同じだが櫓腕と櫓下の捻りが逆である。メーロとワキロはスチョロ、ゴチョロより短く、幅も狭い、トモロは櫓腕と櫓下の角度がきつく、櫓下が深く水に入る工夫が成されている。

舟の間はミヨシには物見（浜男）が立ちナムラ（魚が群れて寄っている所、水の色が変わる、ナムラが大きくかたまっただのをアカミという）を見つかる。ドウノマには上りの網（ロップ）とミドダルが積まれ、最初に降ろして行く。網ノマには戻りのアラテアミ、イチアケアミ、フクロアミ、上りのイチアケ、アラテと積み込む。トモには戻りの網（ロップ）が積まれるのが普通である。

そして舟には7人の漕ぎての他に 物見、頭領（網元で船頭）、網打などで、8～10人が乗り込んだ。現在は 頭領、物見、船外機の操縦者、網打の4～5人である。

### ◎地引き網の構造と網の種類（地引き網 略図参照）

地引き網の構造は昔と変わらないが、何と云っても材料が網は麻、網（ロップ）はマニラ麻からナイロンに変わったことで、網、ロップともに丈夫で、軽くなったことだ。麻の網は天候の悪い日が続くと、すぐに蒸れて破れ、一年も持てば上出来だった。ロップは水を含んで重くなり網寄せは大変な重労働だったが、改善された。網は麻とナイロンでは重さが違いナイロンは軽いのでヤ（重り）を余計に付けなければならない。ヤは石のと焼き物のとがあり、これを縄で縛って重りとする。昔は1キロ位のヤを付けたが、今は1キロ500位のを付ける、網自体は軽くなったが、ヤが重いので全体としては違いはない。

網（ロップ）はナムラの位置や潮流によって違うが片側1000～1500m積み込まれていて順次落として行き、その先にウキダル（ミドダルといい東西の引き具合と尻のコトリヤマと絡め、網の撓みの調整をするための目印）をつけ、更に100m程のロップの先にアラテ（ナガヘイ・オドカシアミ）を繋ぐ（繋ぎ目をハケという）。

アラテ（追い網）は100～150ヒロ（約150m～225m）の縄を何本も並べた縄網で、荒目に縄の開きを留める紐が簾にからめられていて昔はワラ縄で造られた。その先がイチアケアミ（引き網）で50～70ヒロ（約75～100m）あり、この尻がヤマワケ（折り返し）で東西対照となり、その先に魚を追い込んで捕るフクロアミを付ける。その口には大アンバ（大浮き）と目印のウキダル（コトリヤマ）を取り付ける。

網はシラスアミ・シコアミ・鰯・鯆アミ・カマスアミ・チャンコアミ等があったが最近の観光地引き網では色々の魚が捕れるようにチャンコとシラスを組み合わせたハンモッコアミが主流である。シラスやシコ（片口イワシ）はアラテ（ナガヘイ）の目が大きくても恐れて網に入るが、鰯や鯆などのオゾイ（こすい、ずるい）魚になると、逃げてしまうから小さくするので太い縄を使う、シコやチャンコ、ハンモッコは細い縄にする。

引き網（イチアケアミ）とフクロアミの網目はシラスアミはメダカとも言いサイメ（細目）の三十目、シコアミは二十目、鰯、鯆、チャンコ、ハンモッコは十四目、カマスは八ツで、シラス・ハンモッコアミのフクロアミはオオタと言って織った布を縫い上げて造る。

因みに目と言うのは人差し指と親指をひろげた間隔の中の目の数である。ヒロは長さの単位で海では1ヒロは5尺（約1.5m）でこれが一間である。

### ◎潮流と網打ち（鵠沼浦の漁場の図参照）

東に流れる潮をカシマ、西に流れるのをフショー（ワシオ）と云う。

東の方から右回り（時計回り）に網を掛けるのをノボリアミといい、フショーの時は西の方から左回りのクダリアミでナムラを巻いて網を打つ。西に網尻を置き、ロップを落としながら沖を目指し、左舷にナムラを見ながら舟を東に向け、メーロを上げ、アラテ、イチアケアミ、フクロアミと打ち、コトリヤマ（ウキダルでヤマワケとフクロアミの目印）を投げ込みヤマワケ（折り返し）となる。ここでアカトリ（大きな柄の付いた柄杓）をさし上げて岸の引き子（フナカタ）に合図を送り、其の位置からフナカタの引きが始まる。更に東に向かい戻りのイチアケアミ、アラテを打ってから岸に向かいロップを落としながら戻る。カシマの時のノボリアミはこの逆になる。

網打ちはアバ（浮き）と網を投げ入れる網打ちと、ヤ（網に縛った石や焼き物の重り）を投げ入れる者（ヤジャル）が呼吸を合わせて行う熟練を要する仕事で、下手をすると網がからみ魚が逃げてしまう。

以上は普通の網打ちだが、舟が多いときや魚が多く寄っている時、イドミで勝った時等は、二番、三番網に漁場を空けるために、舟で網を引いて間口を閉め、岸に戻る。そうすれば二番、三番網は100ヒロ程（約150m）先に出れば網を打つことが出来る。

網打ちは魚によって違うので時間が異なる。鰯は午後、3時頃に寄ることが多く、オテントウ様が2、3ヒロ（日暮れ）の時に掛けることがあり、夜の場合は月が出てから掛けた。

鰯は潮時を見計らって掛けないと捕れない、特に朝早くの時はアサマズミと云って、朝2時頃起きて、隣の網に気づかれないように暗闇を灯りをつけずに浜に行き、舟を出して網を打つこともあった。

夏、鯉やワカナゴ（ブリの稚魚）が寄ることがあった。そんな時は鰯の網にアバ（ウキ）を余計付けて掛けた。

日比さんのとこのキス網は始めはヤ（重り）を多く付けて岸近くの底を引いてキス（鱈）を捕っていたが地引きになり、名だけ残った。

### ◎地引き網の引き上げ

以前はシラセオカケルで寄せられた引子（フナカタとも言った）がだれでも引くことが出来た、片方6～7人が腰につけた引縄（ヒキナ、ハヨ）の先についているジョッピン（プリダマとも言って丸や四角の板切れ）を足で持ち上げたロップに引つ掛けて固定させ後退りに引いていた。多勢で網に取り付いて引くと、早すぎて網が萎んでしまったり、小人数だと獲物が多いと遅く成って取り逃がすことになった。そ

こでオカマワリは三個のウキダルを見ながら網が歪まぬように東西の引子の引きを合わせる。ハケ（アラテとの繋ぎ目）までヒキナを使って引上げた後は手で手繰って引く、アラテが岸に近ずくとオカマワリが海に入ってアラテ、イチアケアミを旨く操って魚を逃がさないようにフクロアミに追い込んで口を絞り引き終わる。オカマワリはフクロアミを岸に寄せハケを解いて網を反しながらタモで獲物をヨコシマに入れる。今はウインチで巻き上げる関係で揚げ場はほぼ同じ場所だが、以前は引き場は網打ちによりその都度変わり網は引き捨てられる、これを絡ませず手繰って巻いて運ぶのをツナヨセと言い、二人一組で丸太を通して運ぶ、これは主に子供の仕事で、大変な重労働だった。

#### ◎漁獲と流通（地引き網漁の漁獲魚種 参照）

正月は祝儀の初網以外は暇である。2～6月はしこいわしも含め鰯の最盛期で、この鵠沼浦は上鰯、下鰯の字名、浜をヤシバ（鰯干場）と呼んだ様に、鰯が大変捕れた。大漁のときは、浜にそのまま干して日に晒し油を抜いて肥料の干鰯を造った。これを収めていたのが納屋（ナンヤ）のはじまりである。昔の鰯は小ぶりで4尾を串に刺して目刺しにして売るくらいの大きさであったが、今は潮の流れが変わって大きな型の魚が捕れるようになったが、反面アカミが寄らなくなり、漁は減った。4、5、6月は鰹、鯖。夏はまるあじ（青鰹）、鯖。秋口には、かますが引地川の河口に寄った。

しらすは春先と秋口が旬である、現在はクラゲ、ごみが多く地引き網ではあまりねらはない、朝、沖で機械船で巻き網漁で捕っている。毎年3月10～15日が解禁日で11月中までが漁期である。

網が上がるとヨコシマ（横長の竹で編んだ籠で網元＜カプチャ＞の浜印が書いてあり、鰯で四貫目＜16kg＞程入り、秤を兼ねていた）に魚を入れる。これを仲買（イサバシと云った）に任し、魚が寄っている時は網元は2、3番の網掛けに出る。仲買はボテイ（魚商で15人程いた、イッカボテイ＜一荷ボテイとは天秤棒で籠を担いで売り歩く行商人を云った＞）に競って値を付け売り渡す。魚が多く残った時は仲買が引き取り加工する。仲買はカプチャに売上を報告するが、カプチャは黙って承諾するのが普例である。仲買の儲けは六分の口銭でこれは自分で集める。また網元からはじめに現物（漁獲物）をおおよそ一割ぐらいもらう。この二つが仲買の収入である。

今日のように車のない時代の流通は、魚が少ないときは藤沢など近隣をイッカボテイで捌いたが、多い時は加工して京浜地区の市場、八王子、町田、厚木等へ出した。生魚は鰯が主だが夕方に揚がったのを、

すぐ支度して籠に入れて担いだり（オッカケという）、箱に入れ荷車で、夜っ歩き歩いて町田や横浜、大森の市場の朝のセリに間に合うように持って行った。早く持って行く程いい値が付いたので、ウワノリと云って汽車で持って行くこともあった。

#### ◎シロワケ（代ワケ、収穫の配分）のこと

引子には誰が行って引いてもよく、またどの網を引いても良かったが、一日に二軒の網を引くようなことは義理にもしなかった。途中から手伝った人もシロワケがあるが、カブチャはいつ頃来たか見ていてシロワケ高の区別を付けた。また物見、腕の良い若い衆等良く働いた人は一尋半（ヒトヒロハン）と云って、一人半を分けて貰えた。

女は七～八割、子供は仕事（カケゴエ、弁当取り、網寄せ、網引き等）によりヒロの割りが違ったがシロワケがあった。

当初は天引き一割が網元、残りの四分が網代、六分がシロワケになったが、大正中頃から網元 四分、引子 六分となった。六分が豊漁である金額以上になると、その中から酒代、子供達への菓子代を引く、こういうことはフナカタの古参株の人が、全て引代を決めた。一日の漁が終わり、その日の仕切りがすむと、寄り場（網元の村落にある決まった場所）に、網元、引き子共々が寄り、仲買が現金を持って来て、ムシロを敷いて茄子、大根の味噌なますを肴に酒を飲み、シロワケになる。よく鵠沼銀座の宝屋の横、八百力の前にあった松原でシロワケを行ったと聞くと、それは高網の寄り場になっていたからである。

シロワケは収穫があつてのことで不漁のときはカブチャもフナカタも実入りはない。そんなことで「浜の明日」と言う言葉がある。フナカタを呼び込んでも「俺、今日は芋掘りだから行かねえよ」とか浜に出ない引子も結構いる、そんなとき、収穫があるとそれ聞いて、「じゃあ明日行くべえ」と言い「浜の明日だな」となる。反対に「今日、獲れるたよお、明日行って下さいよ」ってふれが来る、「じゃあ行くべえや」と出て来る、ところが不漁に合い、「今日はだめだった」と云って、「おめー、浜の明日だなあ」となる。

地引き網は日銭が上がったが、網元は人集めが大変だった。

#### ◎納屋と納屋集落 のこと

納屋は明治以前に、新田の網元が砂丘の裾を通る新田道で海に出ていたが遠いので、干鰯、網、道具を収めるために堀川に納屋を建て使ったのがはじめのようだ。そしてそこに新田の人が住み着き、集落を造り、田畑を開いたがもともと堀川の地である。

## ○鵠沼浦での漁業資料

◎ 皇国地誌（明治12年2月1日編成）総関 神奈川県令 野村 靖 編纂主任御用掛 星野東作 より

◆ 民業 農ヲ業トスルモノ212戸 漁業ヲ営ムモノ70戸  
漁業、船 9頭 とあり 網元を中心とした組織が9つあったものと思われる。

◎ 鵠沼浦漁業組合（明治35年12月認可）

地引網漁、機具数量は網7丈、漁船14艘

組合長 山上八造（宿庭） 幹事 横田栄太郎（荻田）

組合員 日々卯之助（清水） 浅場新五郎 関根菊次郎（清水） 内田金蔵（荻田） 森井正吉（大東）  
葉山岩吉（堀川） 高橋治之助（海岸） 神原市五郎（堀川） 宮崎紋十郎（上村） 相澤兼松

◎ 大正末年の鵠沼浦の網元一覧

元 網（学校網） 荻田 内田久蔵 鵠沼 3565（本鵠沼 5-13-5）（最初は斎藤元右衛門の持網だった）

新 網 清水 横田信吉 鵠沼 1156（本鵠沼 5-6-15）

新開網 清水 関根菊次 （本鵠沼 5-10）

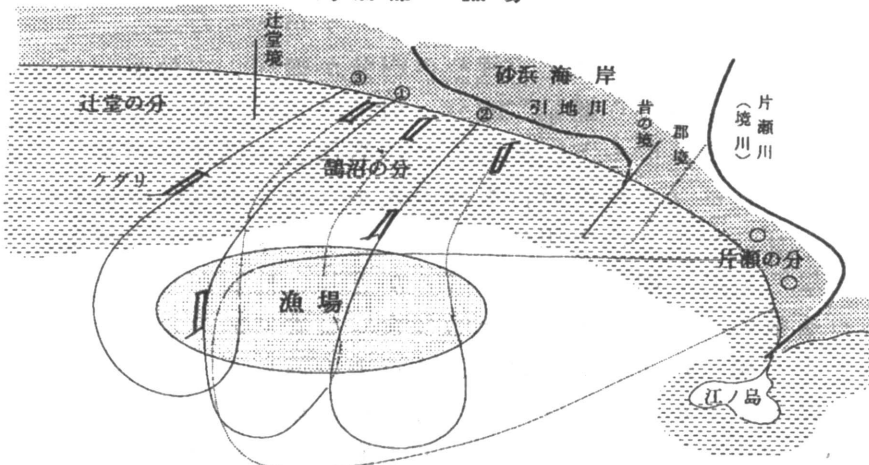
キス網 清水 日々卯之助

高 網 海岸 高橋治之助 現在は辻堂の小沢

大正網 大東 森井正吉

堀川網 堀川 葉山岩吉

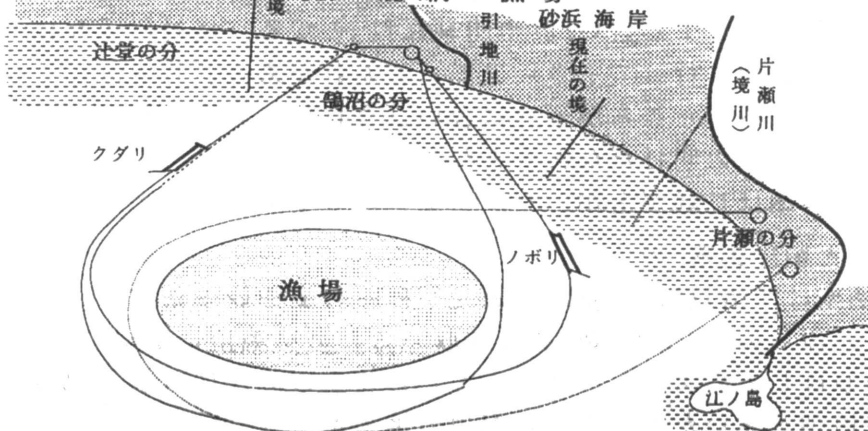
鵠沼浦の漁場



◎ 網が多かったのでナムラを巻いたら、先の船は網の間口が閉まるように片方のロップを曳いて、次の船の網打ちを容易にしながら岸に戻った。

◎ この図は潮の流れがフショ（ワシオ）でケダリの網打ちで、東に流れる潮のカシマの時は反対のノボリの網打ちになる。

現在の堀川網の漁場

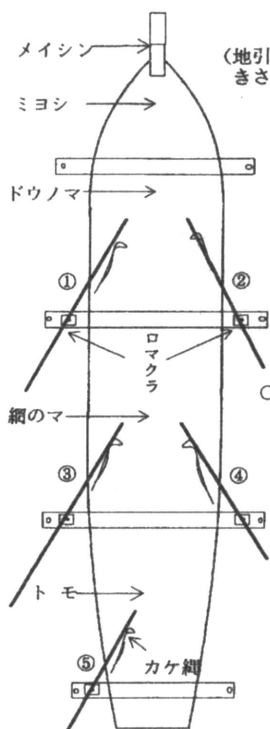


◎ 網元が一網なので漁場は広く曳き場は固定したウインチを挟んで幅100mほど、船外機付きの船は速いので沖を巻いて時間差の網打ちをしている。



## 昔の地引網船

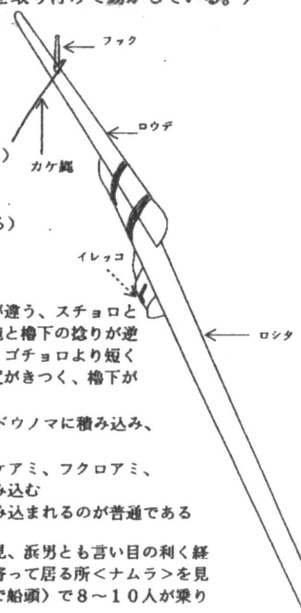
(地引き網船には帆柱はない、櫓を漕いで動かす、現在は船の型、大きさはほぼ同じだが、二台の船外機を取り付けて動かしている。)



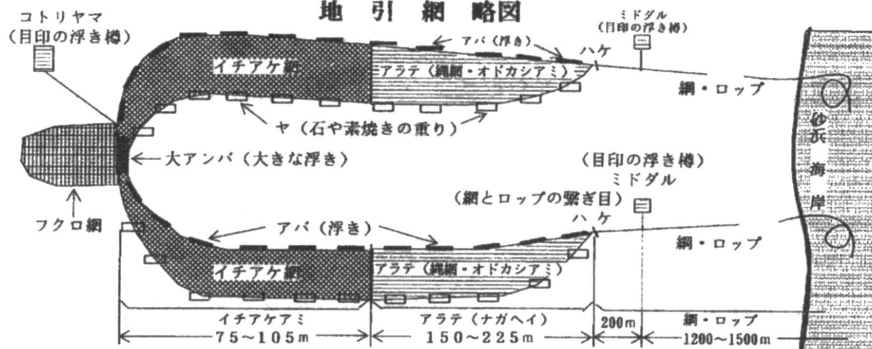
- ① スチョロ (主牽引櫓右漕ぎ)  
<四丁櫓> (通常二人で漕ぐ)
- ② ゴチョロ (主牽引櫓左漕ぎ)  
<五丁櫓> (通常二人で漕ぐ)
- ③ メーロ (補助櫓右漕ぎ、船が速くな  
<前櫓> った時は舵取を手伝う、  
<前舵> クダリの網打ち時はあげる)
- ④ ワキロ (補助櫓左漕ぎ、船が速くな  
<脇櫓> った時は舵取を手伝う、  
<前舵> ノボリの網打ち時はあげる)
- ⑤ トモロ (舵取の櫓、通常船頭、頭  
<船櫓> 領が漕ぎナムラを求め  
て船を操る)

- 櫓はその働きに併せて五本全て作りが違う、スチョロとゴチョロは長さ、幅は同じだが、櫓腕と櫓下の捻りが逆である。メーロとワキロはスチョロ、ゴチョロより短く幅も狭い、トモロは櫓腕と櫓下の角度がきつく、櫓下が深く水に入る。
- ③ 上りの網 (ロップ) とミッドガルはドウノマに積み込み、最初に落として行く
- ④ 網のマには戻りのアラテ、イチアケアミ、フクロアミ、上りのイチアケアミ、アラテと積み込む
- ⑤ トモには戻りの網 (ロップ) が積み込まれるのが普通である

○ 昔は船には漕ぎ手の七人の外に物見、浜男とも言い目の利く経験者でミヨシに立って魚が群れて寄って居る所<ナムラ>を見つける専門家、網打、頭領 (網元で船頭) で8~10人が乗り込んだ。  
現在は頭領、物見、船外機の操縦者、網打ちの4~5人である。

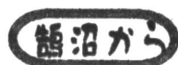


## 地 引 網 略 図



## ◎ 鵜沼浦の地引き網漁の漁獲魚種

| 魚 種         | 一<br>月 | 二<br>月 | 三<br>月 | 四<br>月 | 五<br>月 | 六<br>月 | 七<br>月 | 八<br>月 | 九<br>月 | 十<br>月 | 十一<br>月 | 十二<br>月 |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|
| しらす         |        |        | ---    | ---    | ---    |        |        |        | ---    | ---    |         |         |
| しこ<br>片目いわし |        |        | ---    | ---    | ---    |        |        |        | ---    | ---    |         |         |
| いわし         |        | ---    | ---    | ---    | ---    |        |        |        |        |        |         |         |
| さば          | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---     | ---     |
| あじ<br>まるあじ  |        |        |        | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    |         |         |
| かます         |        |        |        | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    | ---    |         |         |
| その他         |        |        | キハダマグロ | ワカナゴ   | カツオ    |        |        |        |        |        |         |         |



# 大きく広がったメダカの輪

——第3回全国めだかシンポジウム速報——

渡部 暲 (会員)

去る3月23日土曜日、鵜沼東の藤沢市民会館小ホールにおいて、第3回全国めだかシンポジウムが、延べ500人を越す参会者を得て盛大に開催された。これは高知県に事務局を置く日本めだかトラスト協会が主催する催しで、藤沢での主管団体は、小学校教員の研究団体「藤沢メダカの学校をつくる会」を中心とした行政当局や一般市民を含むプロジェクト・チーム。

当日のプログラムは、午前に「神奈川メダカサミット」と題する県内7地域でメダカに関する取り組みに関わる人々の活動報告。トリを務めたのは鵜沼公民館の事業「鵜っ子めだかの学校」で学んだ生徒たちの発表だった。午後は「全国めだかシンポジウム」で、冒頭にメダカに関する作文コンクールとフォトコンテスト入賞者への授賞式に引き続き、三浦市にある国際協力事業団(JICA)神奈川国際水産研修センターの紹介と、そこで学ぶ7か国8名の研修生の挨拶。メインはメダカの系統分類研究の第一人者、酒泉 満 新潟大学教授の基調講演と山形から鹿児島まで全国8地域の活動報告を中心としたシンポジウム。最後に次回(2002年12月)開催地沖縄からのアピールがあった。続いて日本めだかトラスト協会の総会に移り、事業報告や今後の取り組みを採択の後、神奈川県内唯一のメダカ生息地に計画されている道路建設の再考を求める決議がなされた。一方、第1展示集会場では展示会が開かれ、夜には全国めだか交流会がもたれた。アトラクションには、湘洋中学器楽部の弦楽合奏や鵜っ子めだかの学校などの子どもたちの合唱が披露され、喝采を浴びた。和太鼓グループ「メダカ太鼓」も活躍した。

全国からのお客様を迎えるに当たり、本鵜沼駅近くのスワン洋菓子店は「メダカサブレ」を、藤沢橋通郵便局はメダカをデザインした風景印を押したたとうを作ったり、ブティックばすてるはメダカの刺繍入りランチョンマットをベトナムに発注し、それぞれ記念品として好評を得た。

翌24日は池上通信機湘南工場構内の「藤沢メダカの学校池上分校」と江の島水族館の見学後、バスで小田原に向かう。県内唯一のメダカ生息地の視察、満開の桑原土手の桜を愛でながらレンゲの咲く田圃にシートを敷いて昼食の後、童謡「めだかのがっこう」発祥の地に造られた公園を訪れ、市役所では小田原市長に昨日決議されたアピールを手交した。

JICA研修生の感想。「メダカのような食糧にならない、ちっぽけな魚の絶滅が危惧されるということに、日本人はなぜこれだけ関心を寄せるのだろうか？」

# 「江の島道」を歩く

小林 政夫（会員）

遊行寺の門前で東海道とわかれ、江の島へ向かう道を「江の島道」と呼んでいる。江戸時代中期になり、庶民の間に江の島弁財天の信仰が盛んになるとともに、観光旅行を兼ねた参詣者で江の島道も大変な賑わいをみせるようになった。

この道は遊行寺橋から始まり、蔵前、現在の藤沢駅地下道、石上通り、山本橋を渡って片瀬川左岸を龍口寺、神戸川<sup>ごうと</sup>まで続く。現在も、江戸時代の街道とほぼ同じ道が残されている。鎌倉時代には、片瀬・腰越は鎌倉の西の出入口として、また、京都へ続く幹線道路（京鎌倉往還）の宿場でもあった。「駅路の法」によって固瀬駅が置かれたのは文治元年（1185）であるが、それ以前から、この道は藤沢および県北部と江の島・鎌倉を結ぶ道の一つとして重要な交通路であったと思われる。

この小文は、平成13年11月6日に行われた「鵠沼を語る会」の史跡探訪（参加者10人）の参考に配布した資料に、のち一部改訂を加えたものである。

## 1. 藤沢駅と江の島道

東海道線の横浜―国府津間が開通し、藤沢駅が開設されたのは明治20年（1887）7月11日である。初めの計画では、駅は現在の市民病院付近に設置される予定だったが、宿場内の強い反対にあい、江の島道との接点である現在の場所に開設された。やがて町の中心部は、宿場の中心部から徐々に駅前に移り、現在の姿になった。

\* 江の島道は、どんな地形の場所に通じていたか。現在の地形観察

\* 砥上公園に集められた石造物

## 2. 石上神社（砥上明神）

石上付近には、源氏の武士が住み着き、神社は開発の祖である人々を祀ったものといわれるが、起源は詳らかでない。以前は、ここより南の境川渡船場に祀られていたが、奉仕するものも居らず荒れ果て、神銘を刻んだ石塔は若者の力比べに使われていた。昭和9年現地に祀り、石上集落の祭神とした。

### 3. 境川旧河道

相模と武蔵の間を流れていた境川は、藤沢に入って川名付近から蛇行し、大雨が降ると氾濫を繰り返した。その湾曲部は「川袋」と呼ばれたが、川筋は絶えず変わり、そのため現在でも鵠沼と片瀬の境界は複雑に入り組んでいる。江戸時代には渡船場があった。いまはその付近の民家の庭先に地藏堂が残っている。

\* 番地で見える鵠沼・片瀬の境——境川の旧河道と江戸末期の渡船場

\* 上山本橋と山本庄太郎（「鵠沼」83号36ページ参照）

\* 河川の気候、風土への影響

### 4. 大源太の辻の庚申塔

ミネベア工場（旧東京螺子）の門前に、享保15年（1730）の庚申塔が建っている。「<sup>これより</sup>從是右かまくらへ」「<sup>これより</sup>從是左ふじさわへ」と彫られ、道標を兼ねている。昔はここが分岐点であったが、軍の要請による工場の拡張のため、道が南に付け替えられて庚申塔のみが元の位置に残っている。なお、工場の敷地内にはスクモ塚古墳があったが、同じく工場拡張で姿を消したという。

### 5. 馬喰橋と河岸

片瀬山から流れ出る小川にかかっている橋で、かつては石橋だった。源頼朝が馬の鞍をかけて渡ったという伝説から「馬鞍橋」とも呼ばれた。またここで馬がよく死ぬので、ある行者が橋の石を調べたところ、不明な文字が刻まれていたのをみつけ、石を取りかえたら馬が死ななくなったという伝説も伝えられている。そのため「馬殺し橋」の別名もある。この橋付近は、昔の船着場で「河岸」の地名が残っている。「五大力」と呼ばれる五百石船がここまで入り、年貢米の積み出し、物資の陸揚げが行われ、運上役場や船宿もあったといわれている。

\* 駒立山の伝承と砲術練習場（現片瀬山1丁目裏山付近）

### 6. 岩谷不動尊

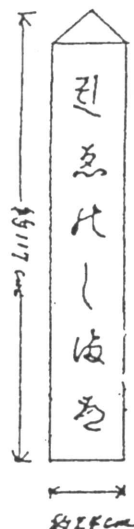
詳しくは石籠山不動尊といい、岩壁に横穴を掘って石造の不動尊を安置している。弘法大師が修行のために穴を掘ったところと伝えられ、元禄8年（1695）に片瀬の人快祐上人が稲荷大明神も勧請し、不動尊を安置した。快祐はこの岩屋で入定したと伝えられる。岩屋は鎌倉時代の「やぐら」と思われる。

\* 鎌倉石の石切場跡と相模野礫層

## 7. 江の島弁財天道標（片瀬小学校入り口）

杉山<sup>けんぎょう</sup>検校（1610－1694）が、江の島弁財天への報贄の一つとして建てたもので、目の不自由な人のための江の島道の道標である。正面には「糸のしまへ」、右側に「一切衆生」、左側に「二世安楽」の文字が彫られている。現在、藤沢市内には12基が残っているが、その一つである。

＊「鵠沼」13号（1983年3月）に伊藤節堂氏の「江のしま道しるべ考」という詳細な論稿が載っている。右の図はそれからの引用。



## 8. 泉蔵寺（真言宗）

嘉禄年間（1225－27）北条泰時の創建と伝えられる。以前は鯨骨にあり、通称「やとの寺」と呼ばれていたが、新田義貞の鎌倉攻めに際し兵火に焼かれ、永正3年（1506）現地に再建された。本尊は不動明王、寺の入り口に多くの石造物がある。相模国準四国八十八ヵ所四十三番霊場。

＊「浪合」「鯨骨」の地名伝承と地震津波

## 9. 諏訪神社下社および上社

祭神は<sup>たけみなかたのみこと</sup>建御名方命・<sup>やさかとめのみこと</sup>八坂刀売命。養老7年（723）に信州諏訪大社から他郷への最古の御分霊社として勧請されたといわれている。下社付近の低地は鯨骨池の跡という。

## 10. 密蔵寺（真言宗）

本尊は薬師如来。相模国二十一番霊場第十七番の札所であり、また相模国準四国八十八ヵ所の十七番札所でもある。境内には弘法大師の石像が三十あまり並べられ、四国の霊場めぐりをしなくても済むようになっている。

境内左側に昭和32年に木暮実千代によって植樹された「愛染かつら」の木がある。これはこの寺に「愛染明王」が祀られているからで、染め物屋の職人の信仰がある。カツラのほかにもナギ、オガタマ、ヒトツバタゴなど、あまりほかにはない植物がみられる。

＊愛染講……5月26日には、県下の染め物屋がこの寺に集まり、商売繁盛、家内安全の祈願をして護摩をたく。

#### 11. 一遍上人地藏堂跡

時宗の開祖一遍上人は鎌倉へ遊行に行こうとするが、幕府の武士たちによって阻止され、片瀬で布教を行った。弘安5年（1282）3月7日から7月16日まで、一遍上人がここに滞在して踊り念仏を唱えた。その様子は「帰依の道俗群をなし…」とか「貴賤雨の如くに参詣し、道俗雲の如くに群集す」と伝えられている。

#### 12. 本蓮寺（日蓮宗）

創立は推古3年（595）聖徳太子の師である高句麗<sup>こうくり</sup>恵慈の弟子義玄和尚によって開かれたと伝えられ、当初は密教寺院であった。元暦（1184-85）のころ、源頼朝によって再建され、鎌倉將軍の祈願所となり、真言宗の寺であったが、嘉元（1303-06）のころ日蓮宗に改宗。江戸幕府からは朱印地を賜り、いまも寺門に「御朱印寺」の木札がかかっている。龍口寺輪番8カ寺の一つ。寺への参道入り口には「鎌倉殿駒牽<sup>こまつなぎ</sup>の松」がある。

\* 龍口寺輪番8カ寺……（片瀬）常立寺・本蓮寺、（腰越）本成寺・法源寺・観行寺、（津村）東漸寺・本龍寺・妙典寺

#### 13. 西行のもどり松

「西行の見返り松」「ねじり松」とも呼ばれ、現在の松は4代目の植え継ぎ。この松と西行について、いくつかの伝承、民話が伝えられている。西行を崇敬した杉山検校の「西行のもどり松」と刻まれた道標が、街道に面して建てられているが、この字は裏面で、正面はあくまで「ゑのしまへ」と彫られた側（現在は裏面）である。

#### 14. 寛文庚申塔

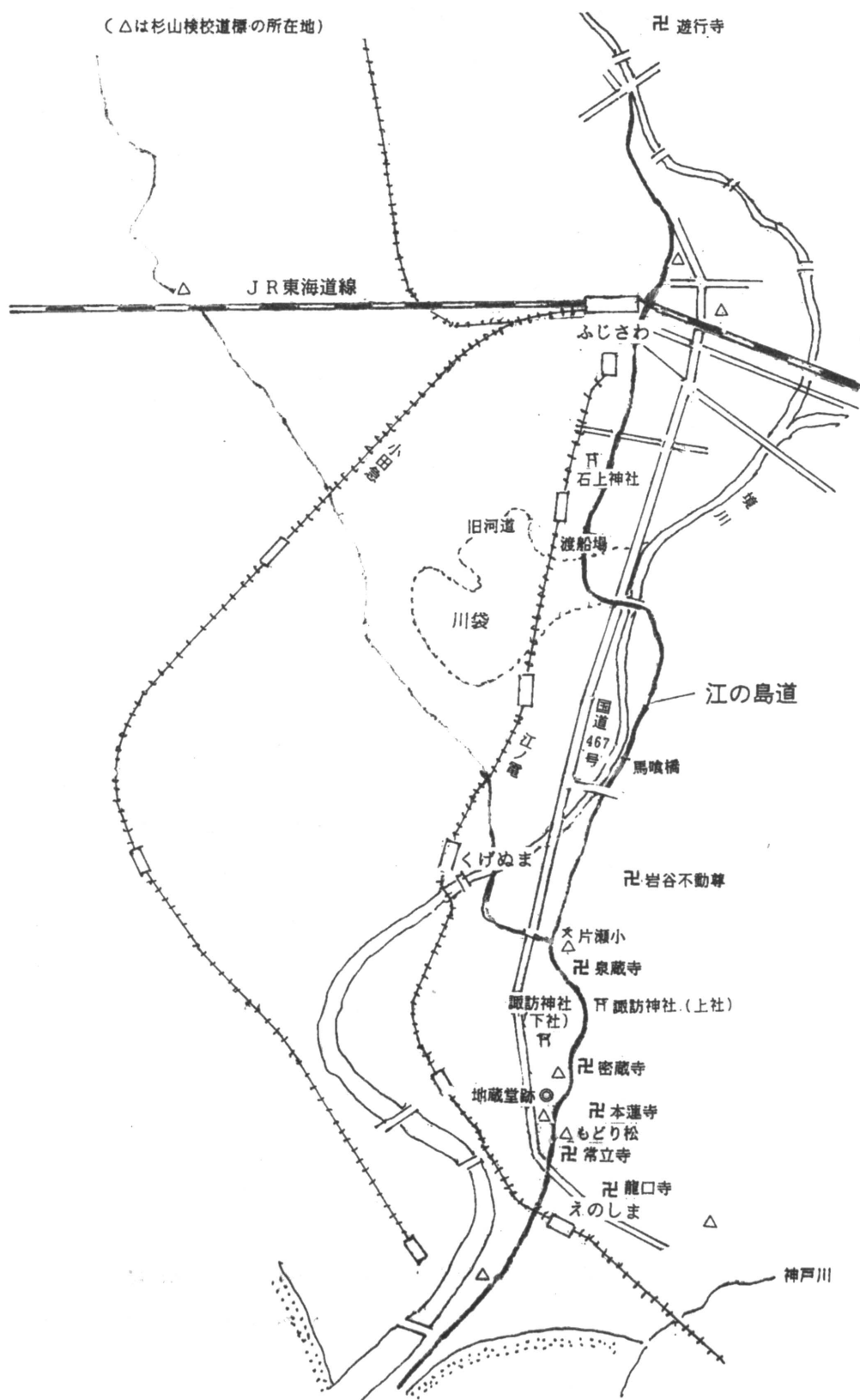
寛文年間（1661-73）に造立され、天保2年（1831）に再建された日蓮宗系の庚申塔。

#### 15. 常立寺（日蓮宗）

この寺のあたりは「龍の口」の刑場跡であり、真言宗の回向山利生寺という寺があった。この刑場では、大庭景親、和田義盛、北条時行をはじめ、蒙古元使らが処刑されており、この寺はそれらの死者を葬って回向供養したところといわれる。境内に「元使塚」がある。永正年間（1504-21）日蓮宗に改宗した。

### 「江の島道」略図

(△は杉山検校道標の所在地)



## ~~「鶴沼」を語る会」 活動の記録~~

(平成13年10月～平成14年3月)

総務委員会

~~平成13年10月例会~~ 10月9日(火) 10時～12時 24名出席

議題1. 公民館まつりについて - 10月27日、28日に行われるが、前日の展示物取り付け作業、当日午前、午後の会場当番、及び終了後の撤去作業等の役割分担を決めた。

また、放映予定のビデオについては、渡部会員が編集して一本にまとめる。

2. 会誌「鶴沼」配布リストおよび配布ルールについて - 会員外配布先と担当者を決め例会欠席者の配布は連絡員が行うこととした。また、別途会誌を希望する会員には、一人2部に限り実費にて分けることにした。

3. その他 - 企画アンケートのまとめを検討した結果、鶴沼文化地図、鶴沼郷土史年表の作成、本村の漁業についての調査、等の提案があった。

公民館まつり準備会23日(火)、運営委員会10月29日(火) 10名出席。

~~平成13年11月例会~~ 11月13日(火) 10時～12時 20名出席

議題1. 公民館まつりについて - 10月27日、28日の両日行われた。28日はあいにくの雨であったが、「華ひらいた鶴沼文化-東屋と文人たち」のテーマに、多数の来場者があり盛況であった。佐江衆一氏揮ごうの「東屋の碑」の書を中心にした展示とビデオ放映が好評で、藤沢市の幹部から「とても良い内容だ、もっと広く市民の人達に見せてもらいたい」との話があった。会としても是非実現させたいと意向を表明した。

2. 郷土資料室(仮称)について - 公民館のセンター化に伴い資料室の設置がほぼ決まり、公民館側と内容について話し合った。センター建設は来年度予算で行うことで決定の見込み。詳細は未定とのこと。

3. 「史跡めぐり」について - 11月6日(火)13時～16時、小林会員の講師で好天のもと藤沢駅から江の島道の旧跡を歩いた。参加者10名。

4. 来年の新年会について - 1月8日の新年例会は「こども室」になってしまい、急拠例会と新年会を兼ねて、館外の会場で行うことになり、詳細は運営委員会一任となった。

5. 勉強会 - 高木会員から「コロネット作戦」について話があった。

運営委員会11月27日(火) 12名出席。

~~平成13年12月例会~~ 12月11日(火) 10時～12時 18名出席

議題1. 来年新年会について - 平成14年1月8日(火)に鶴沼海岸6丁目のレストラン「ティンカーベル」にて11時例会、12時新年会を行うことにした。会費2000円。



2. 「鶴沼」84号に予定している本村地区座談会について - 11月24日(月)に地区の古老7人を囲んで、半農半漁村ころの鶴沼について興味深い話を聞いた。

3. 市民ギャラリーでの開催を企画している「華ひらいた鶴沼文化」展について - 展示室は予定が2年先まであり、入り口ロビーの壁面で行いたいとのこと。

4. シンポジウム「鶴沼の緑と文化財はだれのものか」について - 1月19日(土)に開かれる、会として手持ちの家屋の写真を提供する。個人の資格で出席する。

5. 勉強会 - 内藤会員から「鶴沼の地引き綱」についてビデオ上映と話があった。

運営委員会12月25日(火) 10名出席

平成14年1月例会 1月8日(火) 10時～12時 25名出席

議題1. 市民ギャラリー歴史資料展示について - 公民館長から担当の内藤会員へ要望書を提出してほしいとの要請があり、会長名で作成し提出する。

2. 鶴沼の緑と文化財を守る会について - 会長から1月19日のシンポジウムに出席要請と入会勧奨があった。

3. 会誌「鶴沼」84号について - メインは先の本村座談会「鶴沼むかし語り」パートⅡとし、歴史的建造物は芥川龍之介の「歯車」に出てくる「柳川理髪店」とする。

4. ホームページについて - 渡部会員から会のホームページ開設について説明あり、詳細はホームページ委員会で決める。

5. その他 - 例会終了後26名が参加して新年会を行った。年男の現倉さんの音頭で乾杯し、会食懇談した後、各自持ち寄りの品物を景品にしてビンゴを楽しくやり、和気あいあいのうちにお開きとなった。 運営委員会1月29日(火) 13名出席

平成14年2月例会 2月12日(火) 10時～12時 22名出席

議題1. 市民センターの郷土資料室について - 資料室開設について会の意向を反映させるため、これから開かれる打ち合わせに出席する委員を決めた。

2. オーシャンプロムナード湘南へ展示物提供について - 会議直前に鳥田副館長から要請があったが、市民ギャラリーへの展示が優先するので先送りすることにした。

3. 鶴沼公園に植える桃の木について - 探求クラブより寄贈要請があり、内容を詳しく聞いたうえで妥当であれば、2本寄贈することにした。

4. その他 - 青木会員から「鶴沼の作家今井達夫について」の話があった。今井未亡人も出席されて達夫氏との鶴沼での生活を語られた。

新入会員 石川千恵氏紹介。 運営委員会2月26日(火) 9名出席。

- 議題1. ケーブルテレビの「しおかぜ湘南－文学散歩」について ー去る2月22日、長谷川、高三両会員の案内で撮影された、3月一杯放映の東屋に関するケーブルテレビの同番組について報告があった。また、同テレビより「鵠沼を語る会」の紹介をバステルタイムという番組で取り上げたいとの意向があり、提案の趣旨、詳細について聞くことになった。
2. 鵠沼の文化人リスト作成について ー文化人の範囲、鵠沼に関わった時代等をどうするか議論があり、ともかく対象は鵠沼に過去少しでも居住した人を幅広くリストアップすることとした。
3. 全国めだかシンポジウムについて ー渡部会員から、3月23日に市民会館小ホールにて開催されるとの報告があった。
4. 松が岡公園の桃の木植樹について ー去る3月3日に会として2本植樹。会からの寄贈を記した名札を例会終了後取り付けたいと会長から話があった。
5. 会誌「鵠沼」84号について ー4月2日印刷予定。多数の作業参加を要請した。
6. その他 ー川上会長が急逝され、会員一同心より哀悼の意を表するとともに、長年にわたる会に対する功績に感謝し、葬儀に際し「鵠沼を語る会」として生花をお供えした。
7. 勉強会 ー伊藤会員から「岸田劉生の鵠沼風景について」話があった。

## ー最後になった名札の取り付け

会員 内田 英一

私はかねてから故川上会長のお人柄に惹かれていた次第です。今度会長が「語る会」最後の仕事ともいえる、植樹した桃の木に＜贈呈鵠沼を語る会＞の名札を取り付けるお手伝いが出来ました事は私の喜びであります。

当日例会終了後、公民館より松ヶ岡公園までお供した時、会長は右手に紙袋、左手にも何か荷物をお持ちでした。その歩む姿の足元が頼りなげな様子でした。私は”紙袋をお持ちしましょう”と申し上げたのですが、固辞されたので、内心心配しながら同行したわけであります。

後日桑原氏のお話では、紙袋の中身はアルバム三冊であり、長谷川様宅へ返却の為お持ちであった、とのこと。とすれば、その時の会長の体調としては大変な荷物であったと思われます。無理にでも私がお持ちすればよかったと悔やまれてなりません。

名札取付終了時に桃の木が根付くまで週2回程水を遣りに参りますと会長にお約束してあります。探求クラブの方々が植えた桃の木も他に3～4本ありますが、その方にも水を遣るつもりです。そこまではお約束しなかったのですが、会長に対しての私の気持ちであります。

## 編集後記

\* 会長急逝の報せを受けたのは、ちょうど本誌の頁割りを終えた時でした。一瞬耳を疑い、誤報であることを願ったのですが……。事實は事實として受け止めねばなりません。

\* 気を取り直し編集委員たちと連絡をとり、とりあえず巻頭に4頁を加え、哀悼の意を表すことにしました。会長はたいへん交友の広い方でしたので、執筆者の選択に悩みましたが、幸い親しいお付き合いのあった佐藤さんのご協力を得ることができました。ここに執筆者並びに佐藤さんに厚く御礼申し上げます。

\* 84号のメインは第79号につぐ座談会「鵠沼むかし語り」です。半農半漁の生活を余儀なくされた昔の本村の姿を彷彿させます。しかし水田・畑作はともかく、地引き網については専門の方言が多く、これだけでは判りにくいので、地引き網に詳しい内藤さんに詳細な資料をつくってもらいました。有り難うございました。

\* 鵠沼海岸のマリン・ロードにただ一軒大昔の遺物として取り残されたような柳川理髪店、これこそが本当の歴史的建造物でしょう。このほかにも、いわゆる〈貸別荘〉といわれた家がまだ若干残っているように思われます。これらの建物もクレーン車の牙にかからぬうちにと心がけています。

\* 「江の島道を歩く」は定例の史蹟めぐりのさいのテキストに少し筆を加えていただいたものです。読者の方々にもきっと役立つと思います。小林先生有り難うございました。

\* その他二、三の企画がありましたが、座談会が意外に大きくなりましたので次号回しとしました。ご諒承下さい。

(鈴木)

『鵠沼』 第84号

平成14年3月31日発行

本誌の記事引用の際は  
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001

鵜沼 84号

川上恵久会長

追悼特集号

目次

追悼特集 川上さんを偲んで

|                |         |
|----------------|---------|
| 川上恵久会長が急逝      | 1       |
| 細かい気配りをされた“長老” | 杉山 和彦 2 |
| 第二の人生の指針だった先輩  | 阿部 秀雄 2 |
| 惜 別            | 原田 實 3  |
| 川上さん、どうして、どうして | 佐藤 和子 3 |
| お礼とお詫び         | 鈴木三男吉 4 |

鵜沼の歴史的家をたずねて⑨

芥川龍之介の小説『歯車』に登場する

小林理髪店(現柳川理容店)

岡田 哲明 5

座談会「鵜沼むかし語り」Ⅱ

半農半漁村のころの鵜沼

出席者 関根 佐一郎 浅場 政夫 横田 松良 宮崎 誠一

関根 博 榛葉 昭市 浅場 園江

聞き手 鵜沼を語る会会員 司会 伊藤 聖 13

【資料】昔の鵜沼浦での地引き網漁

内藤 喜嗣 49

大きく広がったメダカの輪

渡部 瞭 58

「江の島道」を歩く

小林 政夫 59

「鵜沼を語る会」活動の記録 総務委員会 64

最後になった名札の取り付け

内田 英一 66

編集後記